

令和2年度碧南市発達障害児者地域生活支援モデル事業 成果物

ICF（国際生活機能分類）を活用した
家庭、教育、福祉のトライアングル連携と
その実効的実現による
発達障害の地域支援体制強化

令和3年3月

愛知県碧南市

目次

1	事業要旨	・・・ P 1
2	ICF情報把握・共有システム(コアセット版)の概要	
	(1) コアセット導入版 ICF 情報把握シート	・・・ P 3
	(2) ICF 情報把握・共有パッケージのシート構成	・・・ P 4
3	コアセット版 ICF システム活用	
	(1) 実施目的	・・・ P 6
	(2) 実施内容	・・・ P 6
	(3) 対象児及び活用者	・・・ P 6
	(4) 事業の流れ	・・・ P 6
	(5) 事業効果を検証する方法	・・・ P 8
	(6) 結果及び分析	・・・ P 2 8
	(7) 考察	・・・ P 4 2
4	日々の支援記録を ICF に直結させる工夫	
	(1) 実施目的	・・・ P 4 3
	(2) 実施内容	・・・ P 4 3
	(3) 対象者	・・・ P 4 3
	(4) コアセット版 ICF システムに直結した日々の 支援記録様式(一部抜粋)と記入方法	・・・ P 4 3
	(5) 事業効果を検証する方法	・・・ P 4 7
	(6) 結果	・・・ P 4 9
	(7) 分析、考察	・・・ P 5 2
5	ICF システムを活用する事業所への費用支弁	
	(1) 実施目的	・・・ P 5 3
	(2) 実施内容	・・・ P 5 3
	(3) 費用支弁までの流れ	・・・ P 5 3
	(4) 対象となる事業所の条件	・・・ P 5 3
	(5) ICF システム活用の対象となる児童	・・・ P 5 3
	(6) 事業効果を検証する方法	・・・ P 5 3

(7) 結果	・・・ P 5 4
(8) 考察	・・・ P 5 7
6 モデル事業の全体の成果	・・・ P 5 8
7 課題と今後の展望	・・・ P 5 8
付録	
1 企画・推進委員会の実施状況等	・・・ P 6 0
2 成果の公表実績・計画	・・・ P 7 4

令和2年度 碧南市発達障害児者支援モデル事業報告

ICF（国際生活機能分類）を活用した家庭・教育・福祉のトライアングル連携とその実効的実現による発達障害の地域支援体制強化

1 事業要旨

(1) 経緯

碧南市では、昨年度までの2年間において、ICFを活用し切れ目のない効果的な支援体制の構築をめざしてきた。一昨年度は未就園児の療育事業、昨年度は幼児期、学齢期の児童に、昨年度は市内の支援者向けにICF研修実施と就学前、幼児期、学齢期の児童にモデル的にICF情報把握・共有システム（ICFシステム）（安達、2018）を活用した。その結果、支援者のスキルアップ、家庭・教育・福祉の連携、保護者支援の充実などにつながった。しかし、ICFシステムを日常の支援に活用するには、情報収集量の多さが課題となった。

(2) 今年度の事業目的

一般的な日常支援におけるICFシステム活用の進展をめざす地域努力を重ねることにより、碧南市地域支援体制の充実と強化を図り、家庭・教育・福祉の実効的なトライアングル連携を目指す。

(3) 実施内容

ア ASD・ADHDコアセットを導入し情報収集項目を絞り込んだICFシステムの活用

①目的：情報収集項目数を絞り込んだコアセット版ICFシステムを活用することで、支援者の負担感を減らし、日常の支援に活用しやすくする。

②方法：児童の福祉サービス事業所利用児および、市単独事業の早期療育親子支援事業参加児が、コアセット版ICFシステムを2～3カ月間活用する。

③効果検証：活用に労力が軽減されたか否かを確認するとともに、コアセット版が令和元年実施の通常版と同等の効果を示すか否かを質問紙により確認する。

イ 日々の支援記録をICFシステムに直結させる工夫

①目的：日々の記録様式をコアセット版ICFシステムに直結したものにすることで、ICFシステムを日常的に使いやすくする。

②方法：コアセット版 I C F システムに直結した日々の支援記録を作成し、支援者がモデル的に活用し、2～3 か月後に I C F システムに記入する。

③効果検証：日々の支援記録の活用の有無で、I C F システムの使いやすさの等について質問紙を用い比較検討する。

イ I C F 研修受講後に I C F システムを活用する事業所への費用支弁

①目的：児童発達支援または放課後等デイサービスの事業所に対し、I C F システム活用および活用継続への動機づけとする。

②方法：児童発達支援または放課後等デイサービスの事業所が I C F システムを活用し、情報収集から関係機関との支援会議を実施した場合、1 回あたり 7,000 円の費用支弁をする。

③効果検証：費用支弁を活用した事業所に I C F システム活用の動機や、継続意欲についてインタビューを行う。また、活用対象児の姿の変化等を企画推進委員から評価を受ける。

(4) 結果

① A S D ・ A D H D コアセットを導入し情報収集項目を絞り込んだ I C F システムの活用

通常版 I C F システムでの課題であった情報収集の労力については、コアセット版の活用により軽減された。コアセット版では通常版に比べ情報収集項目が半減されたが、情報収集からの気づき、支援計画の質、多領域連携での効果的な実現などについて通常版と同様の効果が確認された。

② 日々の支援記録を I C F システムに直結させる工夫

コアセット版 I C F システムに直結した日々の支援記録内容活用することで、慣れるまでに時間はかかったが、使い続けることで記入に慣れ、I C F システムの記入負担が減った。また、支援者自身がこれまでの情報収集項目の偏りに気づき、子どもを見る視点を養う効果も得られた。

③ I C F 研修受講後に I C F システムを活用する事業所への費用支弁

費用支弁においては、1 年間では明らかな効果は確認できなかったが、活用実績のある事業所には、継続活用のきっかけとなった。また、I C F システムを活用したことにより、支援者間の情報共有、支援の統一が図られたことはもとより、虐待の発見や次のラ

イフステージへの引継ぎがスムーズに実施された。

(5) 考察

コアセット版 ICF に直結した日々の支援記録とコアセット版 ICF システムの活用を併用することで、一般的な日常支援においても ICF システムを活用しやすくなると考える。また、それにより多角的な情報収集や支援計画の質の向上、多領域連携など碧南市地域支援体制の充実と家庭・教育・福祉の実効的なトライアングル連携につながると考える。

費用支弁については、現時点ではまだその効果はしっかりと確認できていない。費用支弁の費用等への検討をするとともに、ICF システム活用の動機づけとして活用した支援者の困り感の解消なども評価し、効果として周知していくことも必要であると考える。

今後はさらに支援者、保護者に向けて ICF の考え方やシステム活用のための普及など、ICF の土壌づくりが必要である。

2 ICF 情報把握・共有システム（コアセット版）の概要

(1) コアセット導入版 ICF 情報把握シート

ICF（国際生活機能分類）のコアセットとは、オリジナルの ICF を構成する項目数が膨大であり、実践的な活用に対する障壁となっている状況に対する解決策として、WHO が提案しているものである。コアセットが意味するところは、ある特定の疾患の状態評価に関連する項目を、定められた科学的手続きに則って、選択・検証し、最終的にまとめたもののことである。

今回の事業で活用した ICF 情報把握・共有システム（コアセット版）は自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder；以下、ASD と表記）の ICF コアセット(Mahdi et al., 2018)および注意欠如多動症（Attention deficit hyperactivity disorder；以下、ADHD と表記）のコアセット(Bolte et al., 2018)を昨年度までの本事業で活用してきた ICF 情報把握・共有シート（以下、ICF シートと表記）に導入したものである。

ASD および ADHD のコアセットは、ICF 構成要素である、心身機能・身体構造、活動と参加、環境因子の項目選定と再構成が行われており、包括的コアセット、共通版簡易コアセット、年齢帯別簡易コアセットが提示されている。年齢帯別簡易コアセットの年齢

帯構成は、5歳未満、6-16歳、17歳以上の3つの年齢帯である。今回、ICFシートに導入したコアセットは、年齢帯別簡易コアセットであるが、ASDコアセットとADHDコアセットを構成する項目に重複があるため、両方のコアセットの項目群に論理和をかけた結果により、活動と参加および環境因子のICFシートに導入するコアセット項目群をそれぞれ構成した。加えて、ASDおよびADHDの状態評価に重要と考えられた項目については、簡易コアセットに含まれない項目、包括的コアセットに含まれない項目からも今回のコアセット項目構成に含むこととした。オリジナルのICF簡易コアセットに含まれない項目を付加する作業は、本事業の委員長である安達潤（北海道大学大学院教育学研究院教授）に加え、発達障害支援に長年の経験を持つ児童精神科医である内山登紀夫（大正大学教授・横浜発達クリニック院長）による採否の協議に基づいて行われた。なお、心身機能・身体構造のコアセット項目は、情報把握対象となる児者の日常生活の観察からは正確な評価が困難であるため、今回のコアセットからは除外している。

上記の手順により構成されたICFシートコアセット導入版の項目数を以下に示す。活動と参加シートは、0-5歳版が52項目、6-16歳版が63項目、17歳以上版が64項目となり、環境因子シートは、0-5歳版が39項目、6-16歳版が41項目、17歳以上版が43項目となった。但し、環境因子シートの項目で日常的な評価の対象ではないサービス（第5章）の項目数は、0-5歳版で7項目、6-16歳版で8項目、17歳以上版で9項目である。

以上より、フル項目版のICFシートの項目数と比較した場合、活動と参加のフル項目版127項目が、0-5歳版で5分の2、6-16歳版と17歳以上版では2分の1となり、環境因子のフル項目版84と比較すると、3つの年齢帯とも約2分の1となっている。

(2) ICF情報把握・共有パッケージ

ア 情報把握・共有パッケージのシート構成

活動と参加および環境因子シートがコアセット版となった以外には、変更を加えておらず、パッケージは、医学的診断、健康関連情報、活動と参加（コアセット導入版）、環境因子（コアセット導入版）、支援対象者情報の5つのシートで構成される。

イ 活動と参加シート及び環境因子シートの情報把握手順と回答カテゴリー

情報把握手順と回答カテゴリーもこれまでのICF情報把握・共有パッケージと変更なく、活動と参加シートの各項目は3つの質問（①支援のない状態での困難の有無、②困難がある場合の支援の有無、③支援がある場合の効果）に補足情報を加えた構成である。

環境因子シートについてもこれまでと変更なく、「周囲の人達」については4つの視点(物理的支援、心理的支援、特性理解、障害観)による情報把握、人以外の環境因子については生活への阻害因子であるか促進因子であるかの2視点で情報を把握する仕組みを維持している。活動と参加・環境因子以外の3つのシートについても変更はない。

ウ クラウドシステム

今回の事業においては、昨年度のクラウドシステムの使い勝手が低かったため、エクセルベースによる情報把握シートを必要に応じてパスワード管理を徹底することによるメールシステム等で共有することとした。データ整理作業については、エクセル表のデータフィルタ機能を用いるとともに、事業後半ではデータ分析アプリをコアセット版に合わせて再度開発し、ケースによっては専用のエクセル情報把握シートを用いた。

注) 以上、今回の事業で活用したICF情報把握・共有システム(コアセット版)の説明であるが、ICF情報把握・共有シートのコアセット導入版、コアセット導入版を反映したエクセル情報把握シート、コアセット導入版エクセル情報把握シートの回答分析アプリはの開発は、本事業の企画推進委員会委員長である安達潤(北海道大学大学院教育学研究院)が令和元年度から研究を進めている、挑戦的研究(萌芽)「ICFに基づく情報把握共有システムの発達障害支援における実践検証と活用方法の検討」の研究成果であり、本事業はこれらの成果を援用しつつ、事業を進めるとともに、その実践検証結果を提示する位置づけとなっている。

3 コアセット版 I C F システム活用

(1) 実施目的

情報収集項目数を絞り込んだコアセット版 I C F システムを活用することで、支援者への負担感を減らし、日常の支援に活用しやすくする。

(2) 実施内容

児童の福祉サービス事業所利用児および、市単独事業の早期療育親子支援事業参加児にて、コアセット版 I C F システムを 2～3 カ月間活用する。その後、活用に労力が軽減されたか否かを質問票で確認するとともに、コアセット版が令和元年実施の通常版と同等の効果を示すか否かを確認するため、フィッシャーの正確検定を行う。

(3) 対象児及び活用者

ア 児童の福祉サービス事業所利用児での活用

(ア) 対象児：児童の福祉サービス事業所で利用希望のある児童 6 人（保育園児 3 人、小学生 1 人、中学生 2 人）

(イ) 活用者の所属機関等：児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援、相談支援事業所、保育園、小中学校、保護者 延べ 49 人

イ 早期療育親子支援事業「のんのん」での活用

(ア) 対象児：未就園児 32 人（双子 1 組）

(イ) 活用者の所属機関等：親子支援事業支援員（保育士、看護師）5 人、保護者 31 人

(4) 事業の流れ

ア 児童の福祉サービス事業所利用児での活用

(ア) 情報収集

支援会議の 2 カ月ほど前から情報収集を開始する。「活動と参加」部分の情報収集は、福祉サービス事業所と学校（または保育園）と事前に項目を分担し、情報収集をする。

(イ) 第 1 回支援会議の実施

収集された情報をもとに、関係者および保護者で支援会議を実施し支援計画を検討する。

(ロ) 支援計画の実施と情報の再把握

(ア)と同様に実施。

(エ) 第2回支援会議の実施

第1回支援会議での支援の結果を検討、支援案の修正を検討する。

※(ウ)、(エ)は、第1回支援会議の開始時期により、次年度に持ち越す場合もある。

イ 早期療育親子支援事業「発達支援教室のんのん」での活用

(ア) 情報収集

教室開始前の事前面談および、教室開始後約1か月半で情報収集をする。

※教室は週1回の開催

(イ) ケース検討会議

収集された情報をもとに、教室スタッフでケース検討会議を実施し支援計画を検討する。

(ウ) 保護者との情報共有会

担当保育士等が収集された情報と、そこからわかる子どもの強みや苦手さについて説明する。そして、それをもとに立案した支援計画を見せ、保護者と意見交換を行う。

(エ) 支援計画の実施と情報の再把握

(オ) 第2回ケース検討会議

教室スタッフで支援の結果を検討

(カ) 保護者との情報共有会

教室終了月（開始5カ月目）に、保護者に支援の結果、今後の方向性について説明し、意見交換を行う。

(5) 事業効果を検証する方法

ア コセット版 ICF システムの使いやすさにかかわる質問票

通常版と比較して、コセット版 ICF システムの使いやすさについて評価することを目的として、通常版とコアセット版の両方に活用経験がある支援者を対象に、質問票を実施した。図 3-1 にその質問票を示す。

ICF コアセット活用支援者

ICF コアセットと ICF 通常版の比較評価アンケート

ICF コアセットと ICF 通常版を比較して、以下の質問項目にお答えください。

ICF コアセットと ICF 通常版を比較しての使いやすさについて

(Q1~Q3 は、活動と参加シート、環境因子シートのそれぞれについてお答え下さい)

Q 1) 通常版と比べてコアセットの見出し説明や項目説明は、わかりやすくなったと思うか?

活動と参加シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない
環境因子シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

Q 2) 通常版と比べてコアセットの量であれば無理なく情報収集できると思うか?

活動と参加シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない
環境因子シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

Q 3) 通常版と比べてコアセットは日常の生活での支援で取り入れやすいものになったと思うか?

活動と参加シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない
環境因子シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

Q 4) コアセットであれば日常の生活での支援で取り入れられると思うか?

(この設問は、活動と参加と環境因子の両方のシートを活用するという観点でお答え下さい)

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

#Q4 で「あまり思わない、思わない」と回答された方はその理由をお書き下さい。

ICF コアセットと ICF 通常版を比較しての子どもの状況のわかりやすさについて

(Q1~Q2 とも、活動と参加シート、環境因子シートのそれぞれについてお答え下さい)

Q 1) 通常版と比べてコアセットでも子どもの状況が十分に把握されると思うか?

活動と参加シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない
環境因子シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

Q 2) 子どもの状況把握のため、通常版にはあるがコアセットには不足している項目があったと思うか?

活動と参加シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

#「思う、少し思う」と回答された方は、不足していると思う項目の具体例をお書き下さい。

環境因子シート → 思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

#「思う、少し思う」と回答された方は、不足していると思う項目の具体例をお書き下さい。

図 3-1 ICF コアセットと ICF 通常版の比較評価アンケート

イ コアセット版 I C F システムの活用にかかわる質問票

コアセット版活用での支援の質の向上（情報把握の範囲と質、支援計画、支援の実施結果の向上）について、平成 30 年度に実施した通常版と同様の質問票を実施し、結果を比較した。次頁以降に、今回の事業で実施した質問紙票を図 3 - 2 から図 3 - 5 に示す。

質問票には記入者用と閲覧者用があるが、今回示すのは記入者用である。閲覧者用の質問票では、記入の労力に関する質問を伏せているが、その他の質問項目は記入者用と同じである。

A3rev4.「活動と参加」シートの記入者への質問票

(シート記入者用)

回答者記号()

>>回答前に確認・チェック☑して下さい<<

- a) 情報記入の方法は 自分で記入した インタビューに答えた。
b) わたし(回答者)が実施した記入タイプは 初回実施 再実施 です。
(注:質問2はチェックに応じて、初回実施と再実施の両方またはいずれかに回答して下さい)

1. あなたの役割と立場について該当するにチェック☑して下さい。
- 1) 支援チーム内の役割は チームリーダー チームメンバー
2) 立場は 当事者 : 家族 本人
支援者 : 医師 コメディカル 福祉職 教育職 その他
(支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください)
2. 「活動と参加」シートの担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)にかかった労力について
該当するにチェック☑ 願います。
- 1) 初回実施と再実施にどの程度の労力が必要だったかを5段階(少ない~多い)で評価して下さい。
- a)初回実施 少ない ----- ----- ----- ----- 多い
b)再実施 少ない ----- ----- ----- ----- 多い
3. 「活動と参加」シート全体による情報の把握について該当するをチェック☑して下さい。
(注:回答者がご本人の場合には、「対象児者」を括弧内の「自分自身」と読み替えてください)
- 1) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)ができていること」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
2) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)ができていないこと」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
3) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)に有効な支援」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
4) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)に必要な支援」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
5) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)が身につけるべきスキル」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
6) 本シートによって把握された情報全体によって、現在および今後の支援計画はさらによい
支援計画となっていく。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない



裏面の質問に続けてお答え下さい

図3-2 a 「活動と参加」シートの記入者への質問票(表)

7) 前の質問(6)で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
どのような点で現在および今後の支援計画がさらによくなっていくと思うか、具体的に記載下さい。

8) 支援に携わる人たちが、シートで把握された情報全体を共有すれば、多職種連携による支援が効果的に実現されていく。

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

9) 前の質問(8)で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
多職種連携による支援が効果的に実現されていくと思う理由を具体的に記載下さい。

10) 本シートによる情報把握と引き継ぎが早期から継続できれば、二次障害につながる適応不全を事前に回避していけるだろう。

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

11) 前の質問(10)で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
適応不全の事前回避がどのような形で実現されていくと思うか、具体的に記載下さい。

12) 本シート全体による情報の把握は、担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)に要した労力に見合うものでしたか?

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

13) 本シート全体による情報把握は発達障害への気づきにつながると思いますか?

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

14) 本シートの活用の際に把握された「改善すべき課題」があれば、具体的に記載下さい。

図3-2b 「活動と参加」シートの記入者への質問票(裏)

(シート記入者用)

A 4 rev4. 「環境因子」シートの記入者への質問票

回答者記号 ()

>>回答前に確認・チェック☑して下さい<<

- a) 情報記入の方法は 自分で記入した インタビューに答えた。
b) わたし(回答者)が実施した記入タイプは 初回実施 再実施 です。
(注:質問2はチェックに応じて、初回実施と再実施の両方またはいずれかに回答して下さい)

1. あなたの役割と立場について該当する☐にチェック☑して下さい。

- 1) 支援チーム内の役割は チームリーダー チームメンバー
2) 立場は 当事者 : 家族 本人
支援者 : 医師 コメディカル 福祉職 教育職 その他
(支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください)

2. 「環境因子」シートの担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)にかかった労力について
該当する☐にチェック☑ 願います。

1) 初回実施と再実施にどの程度の労力が必要だったかを5段階で[少ない~多い]評価して下さい。

- a) 初回実施 少ない ----- ----- ----- ----- 多い
b) 再実施 少ない ----- ----- ----- ----- 多い

3. 「環境因子」シート全体による情報の把握について該当する☐にチェック☑して下さい。

(注:回答者がご本人の場合には、「対象児者」を括弧内の「自分自身」と読み替えてください)

- 1) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活に影響する環境因子」があった。
a) 「周囲の人たちにかかわる環境因子」について
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
b) 「製品と用具、自然環境、サービスにかかわる環境因子」について
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
2) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活しやすさにつながる環境因子」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
3) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活しづらさにつながる環境因子」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
4) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)に必要な環境調整支援」があった。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない
5) 本シートによって把握された情報全体によって、現在および今後の支援計画はさらにより
支援計画となっていく。
そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない



裏面の質問に続けてお答え下さい

図 3 - 3 a 「環境因子」シートの記入者への質問票 (表)

6) 前の質問 (5) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
どのような点で現在および今後の支援計画がさらによくなっていくと思うか、具体的に記載下さい。

7) 支援に携わる人たちが本シートで把握された情報全体を共有すれば多職種連携による支援が効果的に実現されていく。

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

8) 前の質問 (7) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
多職種連携による支援が効果的に実現されていくと思う理由を具体的に記載下さい。

9) 本シートによる情報把握と引き継ぎが早期から継続できれば、二次障害につながる適応不全を事前に回避していけるだろう。

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

10) 前の質問 (11) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
適応不全の事前回避がどのような形で実現されていくと思うか、具体的に記載下さい。

11) 本シート全体による情報の把握は、担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)に要した労力に見合うものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

12) 本シート全体による情報把握は発達障害への気づきにつながると感じますか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

13) 本シートの活用にあたって把握された「改善すべき課題」があれば、具体的に記載下さい。

図 3 - 3 b 「環境因子」シートの記入者への質問票 (裏)

A7rev2. (team 共通)「支援計画検討会議の質・チーム協働」の質問紙

(チームリーダー・メンバー共通)

回答者記号()

>>回答前に確認して下さい<<

本評価シートにかかわる支援チーム形成は 初回評価 再評価 のチーム形成 です。

1. あなたの役割と立場について該当するにチェックして下さい。

1) 支援チーム内の役割は チームリーダー チームメンバー です。

2) 立場は 当事者 : 家族 本人
 支援者 : 医師 コメディカル 福祉職 教育職 その他
 (支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください)

2. 今回の支援チームで実施した支援会議におけるチーム協働について

1) あなたは自分の意見を十分に言えましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

2) 他の人たちはあなたの意見に十分に耳を傾けてくれましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

3) 同意できない意見に対してもお互い十分に耳を傾けていましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

4) ぶつかり合いや意見の食い違いを参加者全員で解消し、よい形にまとめあげることができていましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

5) 支援の方向性やアイデアについて、特定の人たちが自分たちの意見に頑なにこだわるということがありましたか？

かなりあった 多少あった あまりなかった なかった

6) 支援方針の決定に、特定の人たちが強い影響力を持っていましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

7) 支援計画実施のための役割分担はチーム全員の合意の上で決定されましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

8) 本人・保護者・支援者にとって有用で建設的な話し合いが参加者全員でできましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

9) 本システムを活用することによって支援会議の質が活用前よりも向上したと思いますか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

3. 支援計画の内容について

1) 支援計画は具体的な情報把握に基づくものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

2) 支援計画は支援対象者の実態に合致したものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

3) 支援計画は支援対象児者の支援ニーズを包括的に捉えたものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

4) 支援計画は支援対象である当事者・家族の納得を得られるものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

5) 本システムを活用することによって支援計画の内容が活用前よりも向上したと思いますか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

図 3 - 4 「支援計画検討会議の質・チーム協働」の質問票

A8rev2. (team 共通)「支援計画の実行と結果」の質問紙

(チームリーダー・メンバー共通)

回答者記号()

>>回答前に確認して下さい<<

本評価シートにかかわる支援チーム形成は 初回評価 再評価 のチーム形成 です。

1. あなたの役割と立場について該当するにチェック☑して下さい。

1) 支援チーム内の役割は チームリーダー チームメンバー です。

2) 立場は 当事者 : 家族 本人
支援者 : 医師 コメディカル 福祉職 教育職 その他
(支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください:)

2. 支援計画の実行結果について

1 a) あなたが分担した支援計画の実行によって、目的の支援課題は解決したと思いますか？

解決した 多少解決した あまり解決しなかった 解決しなかった

1 b) 「あまり解決しなかった・解決しなかった」と回答された方へ。

解決しなかった理由だと思われることを具体的に記載ください。

2 a) 支援計画全体の実行によって支援対象児者の生活は改善したと思いますか？

改善した 多少改善した あまり改善しなかった 改善しなかった

2 b) 「あまり改善しなかった・改善しなかった」と回答された方へ。

改善しなかった理由だと思われることを具体的に記載ください。

3 a) 支援計画は支援チーム全体にとって実行可能なものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

3 b) 「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ

実行可能ではないと思った理由を具体的に記載して下さい。

4 a) あなたが分担した支援計画の役割はあなたにとって実行可能なものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

4 b) 「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ

実行可能ではないと思った理由を具体的に記載して下さい。



裏面の質問に続けてお答え下さい

図 3 - 5 a 「支援計画の実行と結果」の質問票 (表)

5 a) 設問4 a) で「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ。

支援計画の役割実行が難しくなった際に、チームの他のメンバーに相談したり助言を求めたりしましたか？

相談したり助言を求めたり → した しなかった

5 b) 「相談や助言を求めたりしなかった」と回答された方へ

その理由を具体的に記載して下さい。

6) 本システムを活用することによって支援計画の実行におけるチーム連携は活用前よりも向上しましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

7) 本システムを活用することによって支援計画の全体構成と役割分担は活用前よりも明確になりましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

図3-5b 「支援計画の実行と結果」の質問票（裏）

ウ コアセット版 I C F 情報把握・共有システムを活用した振り返りアンケート
 コアセット版 I C F を活用した支援者および保護者に対して、事業全体の経過を振り返っての事業に対する評価アンケートを実施した。アンケートは平成 30 年度に使用したものと同様のもの（支援者用と保護者用）を準備し、2 月から 3 月初旬に回答を求めた。

早期療育親子支援事業では、支援会議ではなく、個別面談実施のため、アンケートの一部を変更して実施した。図 3 - 6 に早期療育親子支援事業保護者用を、図 3 - 7 に早期療育親子支援事業支援者用のアンケートを示す。図 3 - 8 に事業所保護者用を、図 3 - 9 に事業所支援者用のアンケートを示す。

早期療育親子支援事業 保護者用
のんのんに参加したことによる変化について(保護者用アンケート)
1 <u>子どもとのかかわりについて</u> (教室に参加協力する前とくらべて・・・)
(1) 子どもを支援する方法が具体的にわかった。 <input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
(2) 子どものできる事やできるようになった事に気づくようになった。 <input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
(3) 子どもの気持ちを考えてかかわるようになった。 <input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
(4) 子どもを叱ることが少なくなった。 <input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
(5) 子どもを褒めることが多くなった。 <input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
(6) 子どもを変えるより、場面や条件を工夫しようとするようになった。 <input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない

図 3 - 6 a コアセット版 I C F を活用した支援の振り返りアンケート
 (早期療育親子支援事業 保護者用 ; 表)

(7) 子どもがよりよく育つための場面や条件の作り方が少しわかるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(8) 子どもの苦手さやできないことの理由を考えるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

2 自分自身について（教室に参加する前とくらべて・・・）

(1) 子どもの気持ちがなんとなくわかると思えることが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 子どもと一緒にいて楽しいと感じることが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 子育てに少し自信が持てるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 子育てに前向きになれ、子どもと向き合えるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(5) 子育てでイライラすることが少なくなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(6) 子どものことを、いい子だな、大好きだなと思えることが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(7) 子どもに必要な支援について自然な気持ちで考えられるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

3 子どもの情報をもとに話をする個別面談について

(1) 個別面談をしてよかった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 個別面談をしたことで、子育てに対する気持ちが楽になった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 個別面談をしたことで、支援者の人たちとの距離が近くなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

図 3-6 b コアセット版 ICF を活用した支援の振り返りアンケート
(早期療育親子支援事業 保護者用；裏)

ICF 情報把握・共有システムを活用した支援の振り返りアンケート

ICF ツールを活用して子どもたちの支援を行ってきた経験を振り返って、以下の質問項目にお答えください。

1 児の評価と支援に対する捉え方について（あてはまる□にチェック☑願います）

(1) 子どもの日常的で具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 場面や条件で子どもの様子が異なることの確認と共有が、支援の検討に大切だと感じた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 子どもへの働きかけだけでなく、場面や条件を工夫することの大切さも大きいと思った。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 個々の支援を検討する上で、子どもの全体像を捉えて考えることが大切だと思った。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(5) 課題項目の情報と関連する手がかり（子どもの強み、できていること）の組合せで支援を計画していく方法がわかった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

2 支援者チームについて（あてはまる□にチェック☑願います）

(1) 支援者チームで児の状態や支援について話し合うことが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 支援者間で児の話をするときに、より具体的な話ができるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

図 3 - 7 a コアセット版 ICF を活用した支援の振り返りアンケート
（早期療育親子支援事業支援者用；表）

(3) 児の状態に対する思い込みや想像で話すことが少なくなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 他の支援者の話を聴くときに、根拠となるエピソードに留意するようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(5) 互いの見立てが異なったときに、児の状態に影響する場面や条件を探すようになった

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

3 保護者と情報共有することについて (あてはまるにチェック願います)

(1) ICF システムの情報把握は保護者の子ども理解を深めると思う。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 保護者と支援者での子どもの共通理解が、以前より深まった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 以前より、子どもの支援方法を保護者に具体的に伝えることができた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) ICF を使った個別面談では、保護者の聞く姿勢がこれまでの個別面談より積極的だった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

図 3 - 7 b コアセット版 ICF を活用した支援の振り返りアンケート
(早期療育親子支援事業支援者用；裏)

ICF 情報把握・共有システムを活用した支援の振り返りアンケート
ICF ツールを活用した支援に参加協力された経験を振り返って、以下の質問項目にお答えください。

1 子どもとのかかわりについて（支援に参加協力する前とくらべて・・・）

(1) 子どもを支援する方法が具体的にわかった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 子どものできる事やできるようになった事に気づくようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 子どもの気持ちを考えてかかわるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 子どもを叱ることが少なくなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(5) 子どもを褒めることが多くなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(6) 子どもを変えるより、場面や条件を工夫しようとするようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(7) 子どもがよりよく育つための場面や条件の作り方が少しわかるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(8) 子どもの苦手さやできないことの原因を考えるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

2 自分自身について（支援に参加協力する前とくらべて・・・）

(1) 子どもの気持ちがなんとなくわかると思えることが増えた

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 子どもと一緒にいて楽しいと感じることが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 子育てに少し自信が持てるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 子育てに前向きになれ、子どもと向き合えるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

図 3 - 8 a コアセット版 ICF を活用した支援の振り返りアンケート
(事業所 保護者用 ; 表)

(5) 子育てでイライラすることが少なくなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(6) 子どものことを、いい子だな、大好きだなと思えることが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(7) 子どもに必要な支援について自然な気持ちで考えられるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

3 支援会議への参加について

(1) 支援会議に参加してよかった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 支援会議に参加することで、子育てに対する気持ちが楽になった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 支援会議に参加することで、支援者の人たちとの距離が近くなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 支援会議に参加することで、これからの子育てへのエネルギーをもらえた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

4 家族について（支援に参加協力する前とくらべて・・・）

(1) 支援会議で話された内容を、家族にも伝えたいと思うようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 支援会議で話された内容を、家族に伝えることが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 子どもについて、家族と前向きに話せるようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

図 3 - 8 b コアセット版 ICF を活用した支援の振り返りアンケート
(事業所 保護者用；裏)

ICF 情報把握・共有システムを活用した支援の振り返りアンケート

ICF ツールを活用して子どもたちの支援を行ってきた経験を振り返って、以下の質問項目にお答えください。

1 児の評価と支援に対する捉え方について（あてはまる□にチェック☑願います）

(1) 子どもの日常的で具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) 場面や条件で子どもの様子が異なることの確認と共有が、支援の検討に大切だと感じた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 子どもへの働きかけだけでなく、場面や条件を工夫することの大切さも大きいと思っ

た。
 そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 個々の支援を検討する上で、子どもの全体像を捉えて考えることが大切だと思っ

た。
 そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(5) 課題項目の情報と関連する手がかり（子どもの強み、できていること）の組合せで支

援計画していく方法がわかった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

2 支援者チームについて（あてはまる□にチェック☑願います）

(1) 支援者チームで児の状態や支援について話し合うことが増えた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

図 3 - 9 a コアセット版 ICF を活用した支援の振り返りアンケート
（事業所 支援者用；表）

(3) 児の状態に対する思い込みや想像で話すことが少なくなった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 他の支援者の話を聴くときに、根拠となるエピソードに留意するようになった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(5) 互いの見立てが異なったときに、児の状態に影響する場面や条件を探すようになった

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

3 保護者の支援会議への参加について (あてはまるにチェック願います)

(1) 保護者を交えて支援会議を実施することの有用性を実感した。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(2) ICF システムの情報把握は保護者の子ども理解を深めると思う。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(3) 保護者と支援者での子どもの共通理解が、以前より深まった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(4) 以前より、子どもの支援方法を保護者に具体的に伝えることができた。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

(5) ICF を使った支援会議では、保護者の参加姿勢が以前よりも積極的だった。

そう思う ----- 少し思う ----- あまり思わない ----- 思わない

図 3 - 9 b コアセット版 ICF を活用した支援の振り返りアンケート
(事業所 支援者用 ; 裏)

エ コアセット版 ICF システム活用前後での支援計画の比較（企画・推進委員）

(ア) コアセット版 ICF システムを活用した前後で、福祉サービス事業所の個別支援計画が変化したか否かを検証するために、企画・推進委員を対象にアンケートを実施した。図 3-10 に福祉サービス事業所の個別支援計画にかかわるアンケートを示す。

企画・推進委員
事業所個別支援計画の ICF 活用前後評価
A さん分
ICF ツールを活用する前の支援計画と活用した後の支援計画を比較して、以下の質問項目にお答えください。
具体的な支援内容の記載方法について
Q 1) 活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない
Q 2) 活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない
Q 3) 活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない
Q 4) 活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない

図 3-10 新規コアセット版 ICF 活用児の福祉サービス事業所個別支援計画の変化に関する質問票（企画・推進委員用）

(イ) 昨年度、通常版 I C F システムを活用した児童が、今年度、コアセット版 I C F システムを活用した後で、福祉サービス事業所の個別支援計画が変化したか否かを検証するために、企画・推進委員を対象にアンケートを実施した。図 3-11 に福祉サービス事業所の個別支援計画にかかわるアンケートを示す。

事業所個別支援計画の ICF 前回後評価

今回、ICF システムを継続活用した児童の障害児支援利用計画案について、全体を確認した上で前回と今回を比較して、以下の設問にご回答下さい。あてはまる箇所にレ点をお願いします。

Cさん分

前回の支援計画と今回の支援計画を比較して、以下の質問項目にお答えください。

具体的な支援内容の記載方法について

Q1) 前回と比べて今回の記載内容は、より具体的になったと思うか？

前回より向上した ----- 前回と同水準----- 前回より低下した

Q2) 前回と比べて今回の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？

前回より向上した ----- 前回と同水準----- 前回より低下した

Q3) 前回と比べて今回の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？

前回より向上した ----- 前回と同水準----- 前回より低下した

Q4) 前回と比べて今回の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？

前回より向上した ----- 前回と同水準----- 前回より低下した

図 3-11 昨年通常版 I C F を活用し、今年度コアセット版 I C F 活用した児童の福祉サービス事業所個別支援計画の変化に関する質問票（企画・推進委員用）

企画・推進委員は、福祉サービス事業所（児童発達支援、放課後等デイサービス）が作成した各協力児の活用前後の個別支援計画を閲覧した後、1人分ずつ図 3-10、11 のアンケート票に回答した。

オ 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

第1回から第3回までの企画・推進委員会で議論された主な意見を会議の音声記録から抜粋する。

(6) 結果及び分析

ア コセット版 ICFシステムの使いやすさにかかわる質問票

以下、実施した結果を示す。

表 3-1 コセット版 ICFシステムの使いやすさにかかわる質問票の結果まとめ

【ICFコアセットとICF通常版の比較評価アンケート 支援者用】							
支援者用アンケート							
設問1 ICFコアセットとICF通常版を比較しての使いやすさについて							
選択肢 >> 1:思う 2:少し思う 3:あまり思わない 4:思わない		1	2	3	4	中央値	回答数
		度数					
Q1)	活動と参加シート：通常版と比べてコアセットの見出し説明や項目説明は、分かりやすくなったと思うか。	7	2	0	0	1	9
	環境因子シート：通常版と比べてコアセットの見出し説明や項目説明は、分かりやすくなったと思うか。	7	2	0	0	1	9
Q2)	活動と参加シート：通常版と比べてコアセットの量であれば無理なく情報収集できると思うか。	5	3	1	0	1	9
	環境因子シート：通常版と比べてコアセットの量であれば無理なく情報収集できると思うか。	5	3	1	0	1	9
Q3)	活動と参加シート：通常版と比べてコアセットは日常生活支援で取り入れやすいものになったと思うか。	6	3	0	0	1	9
	環境因子シート：通常版と比べてコアセットは日常生活支援で取り入れやすいものになったと思うか。	7	2	0	0	1	9
Q4)	コアセットであれば日常生活支援で取り入れられると思うか。	4	5	0	0	2	9
設問2 ICFコアセットとICF通常版を比較しての子どもの状況のわかりやすさについて							
選択肢 >> 1:そう思う 2:多少そう思う 3:あまりそう思わない 4:そう思わない		1	2	3	4	中央値	回答数
		度数					
Q1)	活動と参加シート：通常版と比べてコアセットでも子どもの状況が十分に把握されると思うか。	8	1	0	0	1	9
	環境因子シート：通常版と比べてコアセットでも子どもの状況が十分に把握されると思うか。	8	1	0	0	1	9
Q2)	活動と参加シート：子どもの状況把握のため、通常版にはあるがコアセットには不足している項目があったと思うか。	0	0	4	5	4	9
	環境因子シート：子どもの状況把握のため、通常版にはあるがコアセットには不足している項目があったと思うか。	0	0	4	5	4	9

・通常版に比べ、コアセットでは見出し説明や項目がわかりやすくなった。コアセットの情報量であれば無理なく情報収集出来る。不足している項目もほとんどなく、コアセットで子どもの状況が十分把握できる。日常生活支援への取り入れについては、肯定的な回答であるが、全面的に強く思うところまではいかない。

イ コアセット版 ICFシステムの活用にかかわる質問票

以下、実施した質問票の結果を示す。

(ア) 活動と参加シートの活用にかかわる質問票

活動と参加シートの活用にかかわる質問票を、令和元年度の結果と比較した。
なお、質問票には閲覧者用と記入者用があるが、これら両方を併せた結果を示す。

表 3 - 2 活動と参加シート質問票 結果まとめ

【ICFコアセット 活動と参加シートに対する質問紙調査の結果】										
選択肢 >> 1 (少ない) -- 2 -- 3 -- 4 -- 5 (多い)				1	2	3	4	5	回答数	労力多い、や や多いの割合
				度数						
設問2 ※記入者 のみ	(1)-a	記入労力の程度 (初回実施)	R2_コア	0	6	3	5	2	16	44%
			R1_フル	0	1	3	2	12	18	78%
選択肢	1 : そう思う 2 : 多少そう思う 3 : あまりそう思わない 4 : そう思わない									
設問3 (項目12は 記入者の み)	本シートの活用で改めて気づいた			1	2	3	4		回答数	肯定回答 の割合
				度数						
	(1)	「対象児者のできていること」があった	R2_コア	32	8	5	0	45	89%	
			R1_フル	16	4	1	0	21	95%	
	(2)	「対象児者ができていないこと」があった	R2_コア	21	14	9	1	45	80%	
			R1_フル	15	5	0	0	20	100%	
	(3)	「対象児者に有効な支援」があった	R2_コア	24	19	2	0	45	96%	
			R1_フル	15	5	0	0	20	100%	
	(4)	「対象児者に必要な支援」があった	R2_コア	29	15	3	0	47	94%	
			R1_フル	16	4	2	0	22	91%	
	(5)	「対象児者が身につけるべきスキル」があった	R2_コア	16	27	1	0	44	98%	
			R1_フル	14	4	3	0	21	86%	

	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4	回答数		
			度数						
設問 3 (項目12は 記入者の み)	(6)	現在および今後の支援計画はさらによく なっていく	R2_コア	25	19	1	0	45	98%
			R1_フル	15	7	0	0	22	100%
	(8)	そして情報共有によって多職種支援連携が 効果的に実現される	R2_コア	28	15	1	0	44	98%
			R1_フル	18	4	0	0	22	100%
	(10)	そして早期からの引継ぎによって適応不全 を事前に回避できる	R2_コア	20	14	10	0	44	77%
			R1_フル	4	15	0	3	22	86%
		「活動と参加」シート全体の情報把握は		1	2	3	4	回答数	
				度数					
	(12)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合 うものだった	R2_コア	8	8	1	0	17	94%
			R1_フル	11	6	0	0	17	100%
	(13)	発達障害への気づきにつながると思う	R2_コア	24	17	2	0	43	95%
			R1_フル	12	9	1	0	22	95%

- ・コアセット版を活用することによる労力の低下は統計的（フィッシャーの正確検定）に有意であり、コアセット版の活用により労力が低下したことが明らかとなった。
- ・コアセット版を活用することによって、対象者が身につけるべきスキルがわかりやすくなったことが統計的検定（フィッシャーの正確検定）により示された。
- ・その他は、通常版とコアセット版で統計的に差は認められなかった。

ウ 環境因子シートの活用にかかわる質問票

環境因子シートの活用にかかわる質問票の閲覧者用と記入者用を併せた結果を示す。

表 3 - 3 環境因子シート質問票 結果まとめ

【ICFコアセット 環境因子シートに対する質問紙調査の結果】									
選択肢		1 : そう思う		2 : 多少そう思う		3 : あまりそう思わない		4 : そう思わない	
設問 3 (項目11は 記入者の み)	本シートの活用で改めて気づいた			1	2	3	4	回答数	肯定回答 の割合
				度数					
	(1)a	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (周囲の人たちに関わる環境因子)	R2_コア	20	16	6	4	46	78%
			R1_フル	12	6	2	1	21	86%
	(1)b	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (製品と用具、自然環境、サービスに関わる環境 因子)	R2_コア	14	20	7	5	46	74%
			R1_フル	10	8	1	1	20	90%
	(2)	「対象児者の生活しやすさにつながる環境因子」 があった	R2_コア	17	19	6	3	45	80%
			R1_フル	10	7	2	1	20	85%
	(3)	「対象児者の生活しづらさにつながる環境因子」 があった	R2_コア	19	20	6	1	46	85%
			R1_フル	10	7	0	1	18	94%
	(4)	「対象児者に必要な環境調整支援」があった	R2_コア	16	22	5	3	46	83%
			R1_フル	7	9	1	1	18	89%
項目11は記入	本シートによって把握された情報全体によって			1	2	3	4	回答数	
				度数					
	(5)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	R2_コア	17	22	7	0	46	85%
			R1_フル	11	8	1	0	20	95%
	(7)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に 実現される	R2_コア	20	23	3	0	46	93%
			R1_フル	10	7	1	0	18	94%
	(9)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に 回避できる	R2_コア	11	25	10	0	46	78%
			R1_フル	3	8	1	4	16	69%
	「環境因子」シート全体の情報把握は			1	2	3	4	回答数	
				度数					
(11)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うもの だった	R2_コア	3	6	1	0	10	90%	
		R1_フル	1	1	0	0	2	100%	
(12)	発達障害への気づきにつながると思う	R2_コア	20	21	4	0	45	91%	
		R1_フル	4	8	1	0	13	92%	

選択肢 > 1: と思う 2: 多少思う 3: あまりそう思わない 4: そう思わない			1	2	3	4	回答数	肯定回答の割合
			度数					
(6)	支援方針の決定に、特定の人たちが強い影響力を持っていたか？（逆転項目）	R2_コア	1	4	14	25	44	89%
		R1_フル	2	3	3	5	13	62%
(7)	支援計画実施のための役割分担はチーム全員の合意の上で決定されましたか？	R2_コア	26	16	2	0	44	95%
		R1_フル	4	9	0	0	13	100%
(8)	本人・保護者・支援者にとって有用で建設的な話し合いが参加者全員でできましたか？	R2_コア	33	8	4	0	45	91%
		R1_フル	5	6	0	2	13	85%
(9)	本システムを活用することによって支援会議の質が活用前よりも向上したと思いますか？	R2_コア	27	16	2	0	45	96%
		R1_フル	9	4	0	0	13	100%
設問2 支援計画の内容について								
選択肢 > 1: と思う 2: 多少思う 3: あまりそう思わない 4: そう思わない			1	2	3	4	回答数	肯定回答の割合
			度数					
(1)	支援計画は具体的な情報把握に基づくものでしたか？	R2_コア	36	7	1	0	44	98%
		R1_フル	10	3	0	0	13	100%
(2)	支援計画は支援対象者の実態に合致したものでしたか？	R2_コア	37	4	3	0	44	93%
		R1_フル	10	3	0	0	13	100%
(3)	支援計画は支援対象児者の支援ニーズを包括的に捉えたものでしたか？	R2_コア	29	11	4	0	44	91%
		R1_フル	7	6	0	0	13	100%
(4)	支援計画は支援対象である当事者・家族の納得を得られるものでしたか？	R2_コア	30	11	3	0	44	93%
		R1_フル	7	6	0	0	13	100%
(5)	本システムを活用することによって支援計画の内容が活用前よりも向上したと思いますか？	R2_コア	25	17	3	0	45	93%
		R1_フル	9	4	0	0	13	100%

・コアセット版では通常版の活用比べ、支援会議でのぶつかり合いや意見の違いを建設的に解消することが、より進展したと言える。ただし、支援会議の進め方を通常版活用時と変えたことも影響していると考えられる。（令和元年度は、事業所と相談支援事業所が事前に支援案を立案し、それを検討した。令和2年度は、参加者全員でKJ法を用いて、課題や支援案を検討した。）

・その他の項目では、統計的（フィッシャーの正確検定）に有意差がなく、通常版とコアセット版で同じ効果が得られた。

オ 支援計画の実行と結果にかかわる質問票

表 3 - 5 支援計画の実行と結果の質問票 結果まとめ

【A8 支援計画の実行と結果 質問紙 回答結果まとめ】								
設問		支援計画の実行結果について						
選択肢 >>		1: 解決した 2: 多少解決した 3: あまり解決しなかった 4: 解決しなかった				中央値	回答数	
		1	2	3	4	度数		
(1a)	あなたが分担した支援計画の実行によって、目的の支援課題は解決したと思いますか？	R2_コア	4	13	0	0	2	17
		R1_フル	3	8	0	0	2	11
選択肢 >>		1: 改善した 2: 多少改善した 3: あまり改善しなかった 4: 改善しなかった				中央値	回答数	
		1	2	3	4	度数		
(2a)	支援計画全体の実行によって支援対象児者の生活は改善したと思いますか？	R2_コア	8	9	0	0	2	17
		R1_フル	2	9	0	0	2	11
選択肢 >>		1: そう思う 2: 多少そう思う 3: あまりそう思わない 4: そう思わない				中央値	回答数	
		1	2	3	4	度数		
(3a)	支援計画は支援チーム全体にとって実行可能なものでしたか？	R2_コア	13	4	0	0	1	17
		R1_フル	9	2	0	0	1	11
選択肢 >>		1: そう思う 2: 多少そう思う 3: あまりそう思わない 4: そう思わない				中央値	回答数	
		1	2	3	4	度数		
(4a)	あなたが分担した支援計画の役割はあなたにとって実行可能なものでしたか？	R2_コア	13	2	1	0	1	16
		R1_フル	8	3	0	0	1	11
選択肢 >>		1: そう思う 2: 多少そう思う 3: あまりそう思わない 4: そう思わない				中央値	回答数	
		1	2	3	4	度数		
(6)	本システムを活用することによって支援計画の実行におけるチーム連携は活用前よりも向上しましたか？	R2_コア	12	5	0	0	1	17
		R1_フル	5	4	0	0	1	9
(7)	本システムを活用することによって支援計画の全体構成と役割分担は活用前よりも明確になりましたか？	R2_コア	10	6	1	0	1	17
		R1_フル	4	5	0	0	2	9

- ・コアセット版の活用では、通常版と同様に、支援計画は実行可能なもので、チーム内の連携が向上し、各役割分担が明確になった。
- ・また、対象児の目的の支援課題や生活改善においても、コアセット版と通常版での活用で同等の効果が得られたと感じている。

カ コアセット版 ICF を活用した振り返りアンケート 結果

表 3-6 コアセット版 ICF を活用した振り返りアンケート（保護者用）
結果まとめ

【ICFシステムを用いた支援の振り返りアンケート】								
<令和2年度コアセット版活用 親子支援事業、事業所保護者と 平成30年度フルセット版活用 にじの学園、親子支援事業保護者との比較>								
保護者用アンケート								
設問 1 子どもとの関わり（教室参加前と比べ）								
1：そう思う 2：多少そう思う								
選択肢 >> 3：あまりそう思わない 4：そう思わない		1 2 3 4				中央値	回答数	
		度数						
Q1)	子どもを支援する方法が具体的にわかった。	R2_コ7	27	7	0	0	1	34
		H30_フル	6	1	0	0	1	7
Q2)	子どものできる事やできるようになった事に気づくようになった。	R2_コ7	25	9	0	0	1	34
		H30_フル	6	1	0	0	1	7
Q3)	子どもの気持ちを考えてかかわるようになった。	R2_コ7	19	15	0	0	1	34
		H30_フル	4	3	0	0	1	7
Q4)	子どもを叱ることが少なくなった。	R2_コ7	6	18	9	1	2	34
		H30_フル	3	3	1	0	2	7
Q5)	子どもを褒めることが多くなった。	R2_コ7	22	11	1	0	21	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
Q6)	子どもがよりよく育つための場面や条件の作り方が少しわかるようになった。	R2_コ7	17	17	0	0	1	34
		H30_フル	5	2	0	0	1	7
Q7)	子どもの苦手さやできないことの原因を考えるようになった。	R2_コ7	22	10	2	0	1	34
		H30_フル	5	2	0	0	1	7
設問 2 自分自身について（ICF活用事業に参加協力する前と比べて）								
1：そう思う 2：多少そう思う								
選択肢 >> 3：あまりそう思わない 4：そう思わない		1 2 3 4				中央値	回答数	
		度数						
Q1)	子どもの気持ちがなんとなくわかると思えることが増えた	R2_コ7	18	15	1	0	1	34
		H30_フル	4	3	0	0	1	7
Q2)	子どもと一緒にいて楽しいと感じることが増えた。	R2_コ7	24	8	2	0	1	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
Q3)	子育てに少し自信が持てるようになった。	R2_コ7	6	21	7	0	2	34
		H30_フル	4	2	1	0	1	7
Q4)	子育てに前向きになれ、子どもと向き合えるようになった。	R2_コ7	16	16	2	0	2	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
Q5)	子育てでイライラすることが少なくなった。	R2_コ7	4	19	10	1	2	34
		H30_フル	3	2	2	0	2	7
Q6)	子どものことを、いい子だな、大好きだなと思えることが増えた。	R2_コ7	27	7	0	0	1	34
		H30_フル	6	1	0	0	1	7
Q7)	子どもに必要な支援について自然な気持ちで考えられるようになった。	R2_コ7	22	11	1	0	1	34
		H30_フル	6	1	0	0	1	7

設問 3 支援会議（親子支援事業は個別面談）について								
選択肢 >> 1：そう思う 2：多少そう思う 3：あまりそう思わない 4：そう思わない			1	2	3	4	中央値	回答数
			度数					
Q1)	支援会議（親子支援事業は個別面談）をしてよかった	R2_コ7	33	1	0	0	1	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
Q2)	支援会議（親子支援事業は個別面談）をしたことで、子育てに対する気持ちが楽になった。	R2_コ7	26	8	0	0	1	34
		H30_フル	6	1	0	0	1	7
Q3)	支援会議（親子支援事業は個別面談）をしたことで、支援者の人たちとの距離が近くなった。	R2_コ7	30	4	0	0	1	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
Q4)	支援会議（親子支援事業は個別面談）をしたことで、これからの子育てへのエネルギーをもらった。	R2_コ7	30	4	0	0	1	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
設問 4 家族について（ICF活用事業に参加協力する前と比べて）								
選択肢 >> 1：そう思う 2：多少そう思う 3：あまりそう思わない 4：そう思わない			1	2	3	4	中央値	回答数
			度数					
Q1)	支援会議（親子支援事業は個別面談）で話された内容を、家族にも伝えたいと思うようになった。	R2_コ7	28	5	1	0	1	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
Q2)	支援会議（親子支援事業は個別面談）で話された内容を、家族に伝えることが増えた。	R2_コ7	27	6	1	0	1	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7
Q3)	子どもについて、家族と前向きに話せるようになった。	R2_コ7	26	6	2	0	1	34
		H30_フル	7	0	0	0	1	7

・全項目について、平成 30 年度と統計的には変化していない（フィッシャーの正確検定）。個別の結果を見ると、平成 30 年度と同様か多少低下となっている項目もあるが「3-4」の回答が認められた項目の「3-4」の回答数の全体に対する割合は 3～6%くらいと小さいので、大きく低下しているわけではない。活用人数が増えて、いろいろなケースの意見が反映されてきたともいえる。

以上より、保護者の気持ちや行動の変容については、コアセット版の活用でも ICF の通常版と同等の効果が得られると考えられる。

表3-7 コアセット版ICFを活用した振り返りアンケート（支援者用）
結果まとめ

【ICFシステムを用いた支援の振り返りアンケート】								
<令和2年度コアセット版活用 親子支援事業、事業所支援者と 平成30年度フルセット版活用 にじの学園、親子支援事業支援者との比較>								
支援者用アンケート								
設問1 児の評価と支援に対する捉え方について								
選択肢 >>		1 : そう思う	2 : 多少そう思う	3	4	中央値	回答数	
		3 : あまりそう思わない	4 : そう思わない	度数				
Q1)	子どもの日常的で具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。	R2_コ7	24	0	0	0	1	24
		H30_フル	13	1	0	0	1	14
Q2)	場面や条件で子どもの様子が異なることの確認と共有が、支援の検討に大切だと感じた。	R2_コ7	24	0	0	0	1	24
		H30_フル	13	1	0	0	1	14
Q3)	子どもへの働きかけだけでなく、場面や条件を工夫することの大切さも大きいと思った。	R2_コ7	23	1	0	0	1	24
		H30_フル	12	2	0	0	1	14
Q4)	個々の支援を検討する上で、子どもの全体像を捉えて考えることが大切だと思った。	R2_コ7	24	0	0	0	1	24
		H30_フル	14	0	0	0	1	14
Q5)	課題項目の情報と関連する手がかりの組合せで支援を計画していく方法がわかった。	R2_コ7	21	3	0	0	1	24
		H30_フル	12	2	0	0	1	14
設問2 支援者チームについて								
選択肢 >>		1 : そう思う	2 : 多少そう思う	3	4	中央値	回答数	
		3 : あまりそう思わない	4 : そう思わない	度数				
Q1)	支援者チームで児の状態や支援について話し合うことが増えた。	R2_コ7	9	14	1	0	2	24
		H30_フル	13	1	0	0	1	14
Q2)	支援者間で児の話をするときに、より具体的な話ができるようになった	R2_コ7	17	7	0	0	1	24
		H30_フル	12	2	0	0	1	14
Q3)	児の状態に対する思い込みや想像で話すことが少なくなった。	R2_コ7	13	10	1	0	1	24
		H30_フル	6	8	0	0	2	14
Q4)	他の支援者の話を聴くときに、根拠となるエピソードに留意するようになった。	R2_コ7	18	6	0	0	1	24
		H30_フル	9	5	0	0	1	14
Q5)	互いの見立てが異なったときに、児の状態に影響する場面や条件を探ようになった。	R2_コ7	15	9	0	0	1	24
		H30_フル	7	6	1	0	1	14

設問3 保護者と情報共有することについて(親子支援事業の支援者のみ)								
選択肢 >> 1: そう思う 2: 多少そう思う 3: あまりそう思わない 4: そう思わない			1	2	3	4	中央値	回答数
			度数					
Q1)	ICFシステムの情報把握は保護者の子ども理解を深めると思う。	R2_コ7	5	0	0	0	1	5
Q2)	保護者と支援者での子どもの共通理解が、以前より深まった。	R2_コ7	5	0	0	0	1	5
Q3)	以前より、子どもの支援方法を保護者に具体的に伝えることができた。	R2_コ7	3	2	0	0	1	5
Q4)	ICFを使った個別面談では、保護者の聞く姿勢がこれまでの個別面談より積極的だった。	R2_コ7	2	3	0	0	1	5
設問4 保護者の支援会議への参加について(事業所関係の支援者のみ)								
選択肢 >> 1: そう思う 2: 多少そう思う 3: あまりそう思わない 4: そう思わない			1	2	3	4	中央値	回答数
			度数					
Q1)	保護者を交えて支援会議を実施することの有用性を実感した。	R2_コ7	17	1	0	0	1	18
		H30_フル	11	2	1	0	1	14
Q2)	ICFシステムの情報把握は保護者の子ども理解を深めると思う。	R2_コ7	15	3	0	0	1	18
		H30_フル	11	2	1	0	1	14
Q3)	保護者と支援者での子どもの共通理解が、以前より深まった。	R2_コ7	16	2	0	0	1	18
		H30_フル	12	2	0	0	1	14
Q4)	以前より、子どもの支援方法を保護者に具体的に伝えることができた。	R2_コ7	9	7	2	0	1	18
		H30_フル	10	3	1	0	1	14
Q5)	ICFを使った支援会議では、保護者の参加姿勢が以前よりも積極的だった。	R2_コ7	15	2	1	0	1	18
		H30_フル	11	2	1	0	1	14

- ・全体的に平成30年度と統計的(フィッシャーの正確検定)には変化していない。
 - ・唯一、問2のQ1「チーム内で児の状態について話し合うことが増えた」に統計的な差が見られた。これは、平成30年度は、支援者チームが平成30年度は「同じ職場の職員」で構成されていたのに対し、令和2年度は家庭・福祉・教育と「支援員が各機関に分かれていた」ことも影響していると考えられる。
- 以上より、支援者のスキル向上やチーム連携についてはコアセット版の活用でもICFの通常版と同等の効果が得られると考えられる。

キ コアセット版 ICF システム活用前後での支援計画の比較（企画・推進委員）
 コアセット版 ICF システムを活用した児童の放課後等デイサービスまたは児童発達支援の個別支援計画を企画・推進委員が 1 ケースずつ前後比較して、評価した結果を表 3 - 8 に示す。また、昨年度、通常版 ICF システムを活用した児童の放課後等デイサービスの個別支援計画を、コアセット版 ICF システムの活用後の個別支援計画と前後比較したものを表 3 - 9 に示す。

表 3 - 8 今年度初めて ICF システム（コアセット版）を活用した児発・放デイの個別支援計画の比較結果（企画推進委員）

アンケート 児童発達支援、放課後等デイサービス 個別支援計画									
設問 具体的な支援内容の記載について									
選択肢 >>	1 : 強く思う 4 : あまり思わない ない	2 : 思う	3 : 少し思う	4 : 思う	5 : 思わない	6 : まったく思わない	中央値	回答数	
									度数
Q1)	活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？	2	5	4	0	0	0	2	11
Q2)	活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？	2	5	3	1	0	0	2	11
Q3)	活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？	1	7	1	2	0	0	2	11
Q4)	活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？	1	4	3	2	0	1	3	11

表 3 - 9 昨年度、通常版 I C F システムを活用した児童の放課後等デイサービスの個別支援計画と、コアセット版 I C F システムの活用後の前後比較結果（企画推進委員）

アンケート 児童発達支援、放課後等デイサービス 個別支援計画						
設問 具体的な支援内容の記載について						
選択肢	1 : 前回より向上した >> より低下した	2 : 前回と同水準	3 : 前回			
		1	2	3	中央値	回答数
Q1)	前回と比べて今回の記載内容は、より具体的になったと思うか？	5	4	0	1	9
Q2)	活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？	4	3	2	1	8
Q3)	活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？	3	6	0	2	9
Q4)	活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？	3	4	2	2	9

・コアセット版 ICF システムの活用により、個別支援計画が具体的で生活適応の改善に役立つものになった。

・コアセット版活用においても、通常版の活用時と同水準の個別支援計画が作成できた。

ク 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

・昨年から ICF システムを使用している。今回項目が減り、スタッフの労力が減りやりやすい。

・コアセットになり情報収集する項目が減ったにもかかわらず、コアセットの活用で普段の活動では見えていない部分が明確になった。

・ICF 評価を統計的に見てよくわかった。令和元年、2年では支援者や扱う対象児が違うので、誤差の範囲かと思うが、割合で言うと若干下がっている項目がある。逆にチームでの協同は肯定的な回答は増えて、割合が高くなっている。労力が減った分だけ連携がしやすくなったのか、その分細かく見るわけではないので、落ちる部分もあるのかもしれない。

・ICF. ASD/ADHD コアセットは ASD、ADHD に特化した項目選定なので併存症としての知的障害の側面は十分にカバーしていない。項目は知的障害を比較的顕著に伴っている子にフィットはしていない可能性への留意は必要。問題性の現れとして知的水準の数値に関わりなく出てくるものとして捉えている部分がある。補完しながら情報をとるといいが、評価者のスキルによる。この先対象理解を深めていき、同じ視点で子どもを見ていくとなると、プラスしていかなければいけないものもある。

・コアセットを行政レベルで現場で試したのは碧南市だけであろう。しかしそういった行政単位での取り組みではそれなりの効果も出てきている。細かい部分で低下している所もあるので、出てきた課題をどう解決していくのか。コアセットで労力を考えて評価を出してきたことはよかった。ICF システムはすごく大変そうという噂があるが、やってみたらすごくいいという結果になることは個々何年かで明らかとなった。活用のよさを現場に伝えていく工夫をさらに積み上げていく必要がある。

・病院の言語聴覚士や作業療法士に支援会議結果をフィードバックした際に、「病院では個別でしか見れないが、自分達（OT、ST）の出した課題と、ICF から上がってくる課題がリンクする面白さがあった」と言われていた。また主治医は、「（医師は）保護者からしか話を聞かないので、小集団の場面での情報をもらえたのは役に立った」と言われた。

(7) 考察

通常版 I C F システムでの課題であった情報収集の労力については、コアセット版の活用により軽減された。コアセット版では通常版に比べ情報収集項目が半減されたが、情報収集からの気づきや、支援計画の質、多領域連携での効果的な実現など通常版でよい効果が確認された項目について、コアセット版でも同様の効果が確認された。以上より、情報収集量が少なくなったコアセット版 I C F システムを活用することで、日常生活の支援に取り入れやすくなると考える。

4 日々の支援記録を I C F に直結させる工夫

(1) 実施目的

日々の支援記録内容をコアセット版 ICF システムに直結したものにすることで、ICF システムを日々の支援に活用しやすくする。また、支援者自身がこれまでの情報収集項目の偏りに気づき、子どもを見る視点を養う。

(2) 実施内容

企画推進委員会でコアセット版 ICF システムに直結した日々の支援記録を作成し、支援者がモデル的に活用する。その 2～3 か月後、コアセット版 ICF システムに記入する。そして、ICF に直結した支援記録の活用の有無での ICF システムの使いやすさの比較などを確認する。

(3) 対象者

早期療育親子支援事業「のんのん」、親子通所施設「にじの学園」、児童の福祉サービス事業所 2 カ所の支援者 16 名

(4) コアセット版 ICF システムに直結した日々の支援記録様式(一部抜粋)と記入方法

ア 支援記録様式 (一部抜粋)

第1章. 学習と知識の応用								
1-1:わかろうとする、知ろうとする、覚えようとする								
1)目的をもって見る・聞く・触る・嗅ぐ・味わう								
見者の様子)A:できる B:特定の場面や支援でできる C:特定の場面や支援で少しできる D:いまはできない E:年齢的に非該当								
d110:目的をもって見る:わかろうとして見る、知ろうとして見る		記録メモ(支援の有無・内容と実際の様子)						
例)色や形の確認、動く物を目で追う、人の様子や行動を見る、スポーツを観戦する。	A B C D E							
d115:目的をもって聞く:わかろうとして聞く、知ろうとして聞く		記録メモ(支援の有無・内容と実際の様子)						
例)声や音を聞き分ける、ラジオ放送や音楽を聴く、説明や授業など人の話を聞く	A B C D E							

図 4 - 1 コアセット版 ICF システムに直結した日々の支援記録様式(一部抜粋)

イ 記録方法の説明

記入に関しては、予め記入方法についての説明文を添付し、開始前に説明をした。説明文を以下に示す。

- ・この記録は、「活動と参加」の各項目について子どもがしやすくなるための手がかりを書き留めておくためのものです。
- ・「どんな場面だとできて、どんな場面だとできないか」「どんな関わり方をしたらどうなったか」を具体的に記入しましょう。
- ・子どもの気持ちなど推測したことは記入せず、子どもや支援者の“行動”をできるだけそのまま記入しましょう。
- ・記入した日付、どの項目を書いているかを記入するとわかりやすいです。

記入例

D130) まねをする a) 動作や行動

○具体的な記入例)

a) 保育士がトランポリンを本児の前の前で跳ぶのを見ると、本児も跳ぼうとするが、うまくジャンプできず、1～2回で終わる。

×よくない記入例)

a) トランポリンを真似て跳ぶこともあるが、あまり興味がなく続けようとしな
い。⇒よくない理由：子どもの気持ちは推測である。具体的でなく、どんな場
面かわからない。

図4-2 ICFに直結した日々の支援記録様式の記入説明文

ウ ICFコアセット早見表

日々の支援記録を活用開始後、親子支援事業の職員が自主的にICFコアセット早見表を作成した。その後、他の支援員にも周知し使用した。

<< ICF コアセット 早見表 >> 0～5歳児用		
< 1章 <small>学習の場</small> >		
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 見る ◦ 聞く ◦ 角虫 ◦ 匂い ◦ 味わう 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 真似する ◦ 質問する 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 言葉 ◦ 言葉を書き ◦ 物の遊ぶ ◦ 生活のスキル ◦ 注意の集中 ◦ 問題解決
< 2章 <small>生活の課題</small> >		< 3章 <small>コミュニケーション</small> >
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 作業をする ◦ ストレス不安な中での作業 ◦ 場面に応じた行動コントロール 		<ul style="list-style-type: none"> ◦ メッセージの理解・伝達 ◦ 会話を ◦ 電話やメール
< 4章 <small>身体</small> >		< 5章 <small>心のケア</small> >
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 姿勢を変える ◦ 手と指 ◦ 手と腕 ◦ 移動力 		<ul style="list-style-type: none"> ◦ トイレ ◦ 衣服靴着脱 ◦ 食べる ◦ 飲む ◦ 健康保持 ◦ 危険回避
< 7章 <small>関係</small> >	< 8章 <small>遊び</small> >	< 9章 <small>レジャー</small> >
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 友人関係 ◦ 家族関係 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 一人や誰かと遊ぶ ◦ 園で遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ イベントや遊びかけやレジャー

図4-3 ICFコアセット早見表

エ 実際の記録の一部

実際の記録の一部を図5-4に示す。このように、毎回、数項目ずつ状況を記入した。

第1章. 学習と知識の応用								
1-1: わかろうとする、知ろうとする、覚えようとする								
1) 目的をもって見る・聞く・触る・嗅ぐ・味わう								
児者の様子) A: できる B: 特定の場面や支援でできる C: 特定の場面や支援で少しできる D: いまはできない E: 年齢的に非該当								
d110: 目的をもって見る: わかろうとして見る、知ろうとして見る		記録メモ(支援の有無・内容と実際の様子)						
例) 色や形の確認、動く物を目で追う、人の様子や行動を見る、スポーツを観戦する。	A B C D E	<ul style="list-style-type: none"> ・シールを目の前に見せると、シール剥がし丸の中に貼る。(7/1) ・他児が遊んでいる姿を傍で見る。玩具があいた後遊びだす。(7/1) ・突然窓の外の電線を指さして笑顔で母に伝える。(7/1) ・朝、シール帳を手渡すと自分から椅子に座り、先生と目を合わせたりしながらシールを貼る。(7/8) ・カタカタで車が走るのを最後まで見続ける。動くヒヨコのイラストを追いかけて息を吹きかける。(7/8) 						
d115: 目的をもって聞く: わかろうとして聞く、知ろうとして聞く		記録メモ(支援の有無・内容と実際の様子)						
例) 声や音を聞き分ける、ラジオ放送や音楽を聴く、説明や授業など人の話を聞く	A B C D E	<ul style="list-style-type: none"> ・体操の曲が流れると音のする方向を何度か見る。(7/1) ・みんなが遊んでいる中で保育士が大きい声で「体操するよ」と言うとすぐに保育士のほうを見る。(7/1) ・粘土の絵本を最後まで椅子に座って聞いていた。(7/8) ・ざわざわしている中や本児がぐずっている時に本児に向けて声を掛けると声のした方をすぐ見る。(7/15) ・本児がぐずっている時に母が魚の名前を言うと、すぐに泣き止み楽しそうに魚の話題をしながら靴を履き始めた。(7/15) 						

図4-4 ICFに連携した日々の支援記録

(5) 事業効果を検証する方法

ア ICF連動 日々の記録評価にかかわる質問票

ICFに直結した支援記録の活用の有無でのICFシステムの使いやすさの比較評価することを目的とし、日々の記録を活用した支援者に質問票を実施した。

図4-5にその質問票を示す。

日々の記録 活用支援者
ICF 連動 日々の記録の評価
ICF 連動 日々の記録に対して、以下の質問項目にお答えください。
ICF 連動 日々の記録の使いやすさについて
Q1) 日々の記録を使い始めた当初は、記入が難しかったと思いますか？ <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない <u>Q1)で、思う、少し思うと回答された方 → その理由をお書きください。</u>
Q2) 日々の記録を使い続けることで、記入することに慣れてきたと思いますか？ <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない <u>Q2)で、思う、少し思うと回答された方 → Q3, Q4にお答えください。</u>
Q3) 日々の記録の記入に慣れた理由は何だと思えますか？(複数回答可) ① どここの項目にどのような内容を記入するかわかってきた ② ICF 早見表が役に立った ③ 子どもの姿を場面とセットで記入することに慣れてきた ④ ICF の考え方が身についてきた ⑤ どういった情報を取りたいか整理できてきた ⑥ その他 ()
Q4) どのくらいで記入に慣れましたか？ ① 1～2回目の活用で慣れた ② 3～4回目の活用で慣れた ③ 5～6回目の活用で慣れた ④ それ以上 (回くらいの活用)
<u>Q2)で、あまり思わない、思わない、まったく思わないと回答された方 → Q5にお答えください。</u>
Q5) 使い続けても日々の記録の記入に慣れない(記入が難しい)点はどこですか？(複数回答可) ① 子どもの姿を、どこの項目に記入してよいかわからない ② 子どもの姿を場面とセットで記入することに慣れない ③ その他 ()

図4-5a ICF連動 日々の記録評価にかかわる質問票(表)

ICF 連動 日々の記録を活用後の気づき

Q 6) 日々の記録を使ってみて、これまで自分が収集していた情報に偏りがあったと感じますか？

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

Q 7) 日々の記録を使うことで、子どもを見る視点が養われると思いますか？

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

ICF 連動 日々の記録を活用することでの ICF システムの取り入れやすさ

Q 8) 日々の記録を活用することで、ICF システムへの記入がしやすくなったと思いますか？

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

Q8)で、あまり思わない、思わないと回答された方 → その理由をお書き下さい

Q 9) 日々の記録を活用することで、ICF システムへの記入の時間が短縮したと思いますか？

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

Q9)で、思う、少し思うと回答された方はQ 9 補足にお答え下さい。

Q 9 補足) 日々の記録活用前と比べて 1 回あたりの記録時間がどのくらい短縮されました？

5分未満 --- 5分～10分 --- 10分～15分 --- 15分～20分 --- 20分～25分 --- 30分以上

Q 1 0) 日々の記録を活用すれば、ICF システムへの記入は負担なくできると思いますか？

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

ICF 連動 日々の記録を活用することでの情報収集時間の変化について

Q 1 1) 日々の記録を活用する前と比べると、日常業務の記録時間は短縮されたと思うか？

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

ICF 連動 日々の記録の日常生活支援への取り入れについて

Q 1 2) 今後の日々の記録を日常生活支援で活用しようと思うか？

思う --- 少し思う --- あまり思わない --- 思わない

ICF 連動 日々の記録について、改善したほうがよいと思う点があれば記入

(6) 結果

ア ICF連動 日々の記録評価にかかわる質問票の結果

以下に実施した結果を示す。

表4-1 日々の支援記録をICFに直結させる工夫にかかわる質問票の結果まとめ

【ICF連動日々の記録の評価 質問紙 まとめ】							
設問1 ICF連動 日々の記録の使いやすさ							
選択肢 >>		1	2	3	4	中央値	回答数
		度数					
(1)	日々の記録を使い始めた当初は、記録が難しかったと思いますか？	8	3	3	2	1.5	16
(2)	日々の記録を使い続けることで、記入することに慣れてきたと思いますか？	5	9	2	0		16
(3)	日々の記録の記入に慣れた理由は何だと思えますか？（複数回答可）	回答数					
	①どここの項目にどのような内容を記入するかわかってきた	11					
	②ICF早見表が役に立った	5					
	③子どもの姿を場面とセットで記入することに慣れてきた	4					
	④ICFの考え方が身についてきた	3					
	⑤どういった情報を取りたいか整理できてきた	5					
	⑥その他	0					
(4)	どのくらいで記入に慣れましたか？（複数回答可）	回答数					
	①1～2回目の活用で慣れた	5					
	②3～4回目の活用で慣れた	2					
	③5～6回目の活用で慣れた	2					
	④それ以上	4					
(5)	使い続けても日々の記録の記入に慣れない点はどこですか？（複数回答可）	回答数					
	①子どもの姿を、どここの項目に記入してよいかわからない	0					
	②子どもの姿を場面とセットで記入することに慣れない	0					
	③その他（日々の記録を活用する機会が少なく慣れるまでに至らなかった）	2					
	具体的内容（活用回数が少なかったため）						

設問 2 日々の記録を活用後の気づき							
選択肢 >>	1: 思う 2: 少し思う 3: あまりそう思わない 4: 思わない	1	2	3	4	中央値	回答数
		度数					
(6)	日々の記録を使ってみて、これまで自分が収集していた情報に偏りがあったと感じますか？	6	10	0	0	2	16
(7)	日々の記録を使うことで、子どもを見る視点が養われると思いますか？	12	4	0	0	1	16
設問 3 日々の記録を活用することでのICFシステムの取り入れやすさ							
(8)	日々の記録を活用することで、ICFシステムへの記入がしやすくなったと思いますか？	8	6	1	0	1	15
(9)	日々の記録を活用することで、ICFシステムへの記入の時間が短縮したと思いますか？	4	5	4	0	2	14
(10)	日々の記録を活用すれば、ICFシステムへの記入は負担なくできると思いますか？	5	6	3	1	2	15
設問 4 日々の記録を活用することでの情報収集時間の変化について							
(11)	日々の記録を活用する前と比べると、日常業務の記録時間は短縮されたと思いますか？	0	9	6	0	2	15
設問 5 日々の記録の日常生活支援への取り入れについて							
(12)	今後の日々の記録を日常生活支援で活用しようと思いますか？	7	8	1	0	2	16

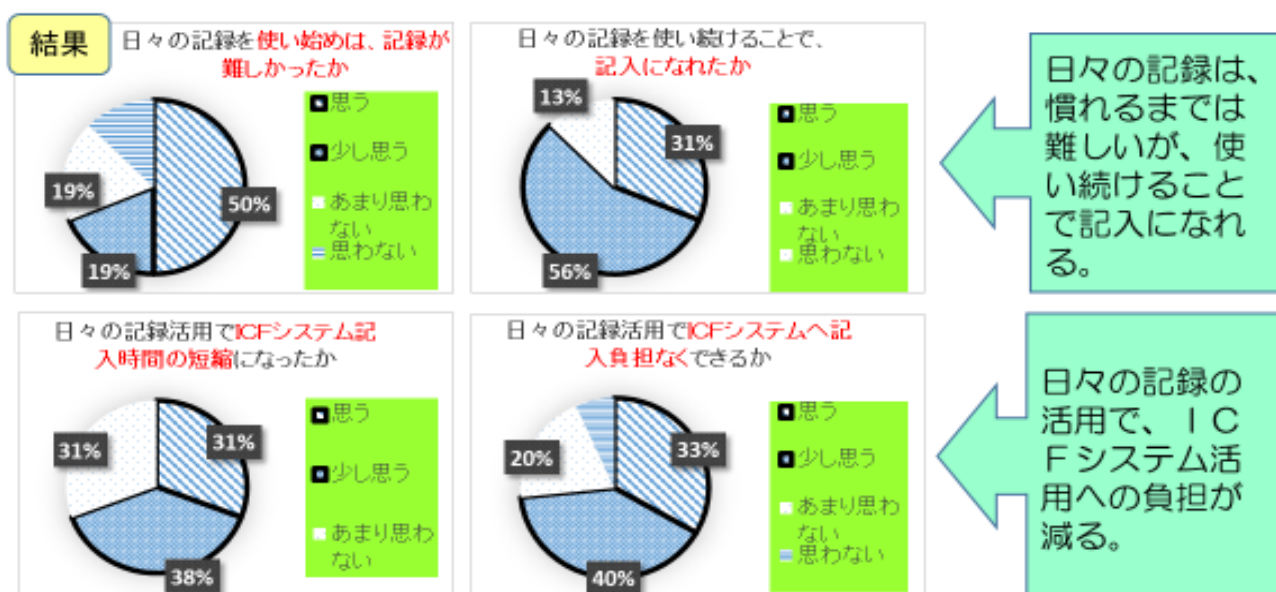


図 4-6 コアセット版 ICFシステムに直結した日々の支援記録の活用結果①

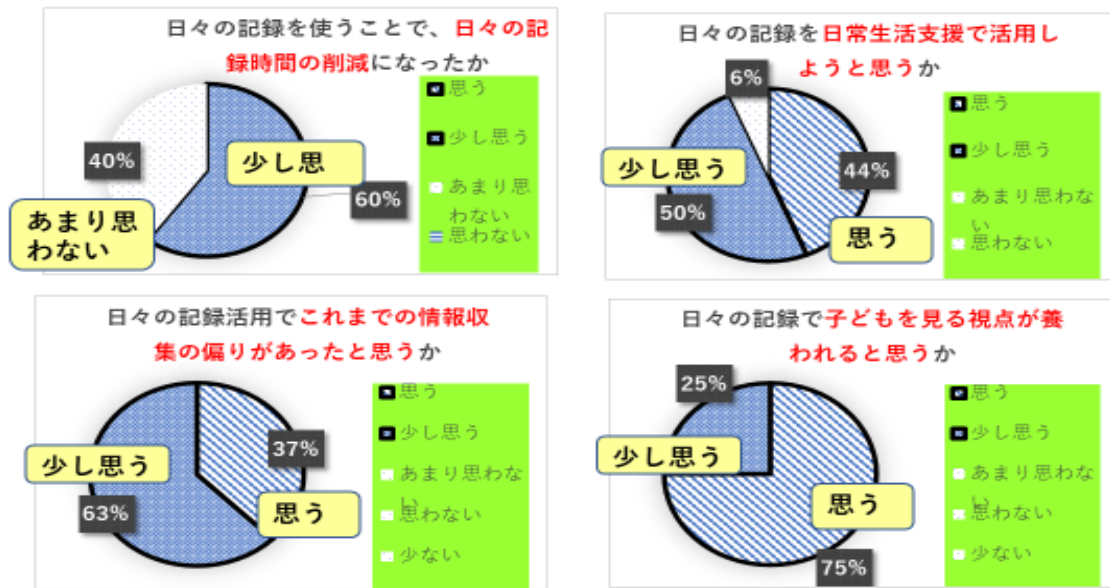


図4-7 コアセット版 ICFシステムに直結した日々の支援記録の活用結果②

イ 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

第1回から第3回までの企画・推進委員会で議論された主な意見

- ・現場で日々行われている記録は主観的になりやすく、自由記述中心で漠然としやすい。しかし今回の事業で作成された「日々の記録」を使うことで、子どもを見やすくなるのではないかと。しかし、使うことで項目が「できればいい」という見方になり逆に子どもにやらせてしまうことになるとうよくない。しっかり見ていけるようにするいい方法があるといい。
- ・ICFシステムは評価ではなくて支援であり、どう支えていくかである。そこを伝えていけるようにする。言葉を「支援」ではなく「環境調整にする」など検討する
- ・記録を書くときに、今は「活動と参加」を書いていると意識する。やりながらリマインドする。用紙の隅に分かるように記入しておく。すり合わせをしていくといいのではないかと。
- ・スタッフの見る目が養われていると感じた。保護者に「こうするとできた」と、伝えることができたことでスタッフに自信がついてきている。

(7) 分析、考察

ICFシステムに直結した日々の記録は、慣れるまでには少し時間がかかるが、使い続けることで記入に慣れ、ICFシステムの記入負担が減ると考える。

ICFシステムに直結した日々の記録の活用で、自分の情報収集の偏りに気づき、子どもを見る視点が養われる。日々の記録の記入にあたり、“ICFシステム評価ではなくて支援であり、どう支えていくかを考えることが大切である”ことを事前に周知する必要がある。

5 ICFシステムを活用する事業所への費用支弁

(1) 実施目的

令和2年4月にICFシステムの普及促進を目的とし、『碧南市ICF情報把握・共有システムを使った発達支援普及事業』を5年間限定で制定した。そして、普及促進を目的にICFシステムを活用する事業所への支援として、費用の支弁を行う。

(2) 実施内容

児童発達支援または放課後等デイサービスの事業所が、ICFシステム活用し、情報収集から関係機関との支援会議を実施した場合、1回あたり7,000円の費用支弁をする。全体の流れは下記のとおり。費用支弁を活用した事業所にICFシステム活用の動機や、継続意欲についてインタビューを行う。

また、活用対象児の姿の変化等を企画推進委員から評価を受ける。

(3) 費用支弁までの流れ

ICFシステム活用の事前申請→利用決定→ICFシステム活用開始→主治医、学校、園へは市役所から情報提供依頼→情報収集～第1回支援会議（サービス担当者会議の位置づけ：支援方法を共有）→完了報告→費用支弁（1回7,000円）

※1回の支援会議だけでは、支援の結果が共有されないため、第2回支援会議まで実施することを基本とする。

(4) 対象となる事業所の条件

ICF研修（3日間）を受講した職員が在籍していること

(5) ICFシステム活用の対象となる児童

以下のいずれにも該当する児童

ア 児童発達支援又は放課後等デイサービスを利用している児童

イ 不適切行動などがあり、幼稚園、保育園、学校、事業所等と協力体制及び連携が必要な児童

ウ ICFシステム活用について、保護者が同意している児童

(6) 事業効果を検証する方法

活用対象児の姿の変化等を企画推進委員会で報告し、委員から評価を受ける。費用支弁を活用した事業所に対し、ICFシステム活用の動機や継続意欲について、意見を伺う。

(7) 結果

ア 令和2年度 費用支弁活用件数 12件（情報収集から支援会議までを1回とし1件とカウントする。）

（活用対象児実人数7名、うち第2回支援会議実施児5名）

イ 費用支弁活用事業所数 2カ所（いずれも昨年度モデル事業にてICFシステムを活用経験のある事業所）

ウ 事業所が費用支弁を活用して実施した対象児の姿の変化

	学年等	困難な状況等	支援の方向性等	対象児の姿	その他
1	保育園 年少	不安が強く水へのこだわりが止まらない。母の不安が強い。	・環境を整える（目の前で見せる、実物を見せる、同じ声かけなど）	・言葉での伝達がきるようになり、不安な様子がかなり減った。	・当初保育園では、半年間半日保育であったが、支援会議後1日保育となった。 ・支援会議は両親が参加
2	保育園 年少	自分の世界に入り、人との関わりがほとんどない。母の不安が強い。	・環境を整える（個別、同じ声かけ、目の前、ジェスチャー、短い言葉）など	・人に要求することや興味を持つことが増えた。 （母が明るくなった）	・通所箇所が多く（5カ所）、園で疲れた様子があることを共有。
3	保育園 年中	登園、通所が継続的にできず、2語文の言葉も全く出なくなり、無気力な状態。	・登園への支援 ・安心できる環境、声掛けの支援 ・保護者への支援	・言葉や表情が元に戻った。	・情報共有で虐待が発見された。毎朝保育園職員が迎えに行く。

4	保育園 年長	<ul style="list-style-type: none"> 感情コントロールがうまくいかず、日常生活に支障あり (特に保育園生活) 	<ul style="list-style-type: none"> 伝え方の工夫 (1対1、好きなフレーズの活用、選択しを少なく、実体験を積む) 環境を整える 得意なこと (文字がよめる、記憶力がよい) を活かす 	<ul style="list-style-type: none"> 感情のコントロールもできるようになった。 人との関わりが上手になった。 	<ul style="list-style-type: none"> 経験していない事は自信を持つことができない時もあるが、実物を見せる、体験することが有効的。 環境整えることで本来持っている力が発揮できる。
5	小学 2年	<ul style="list-style-type: none"> 不安になると他害行為がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉への支援 集中しやすい環境づくり パニック時の対応 	<ul style="list-style-type: none"> 先月まではパニック、他害があったが、最近は落ち着いた。 	<ul style="list-style-type: none"> 第2回目支援会議には両親が参加予定
6	中学 1年	<ul style="list-style-type: none"> 不安が強く自傷行為がある。 登校への不安が強く不眠になる。 	<ul style="list-style-type: none"> 初めての事、見通しを持っていないことに不安が強い。→見通しを持てる支援の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 学校に行く楽しみを持てるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学進学時は、うまく情報が伝わらない部分があったが支援会議後、中学校とも情報共有できた。
7	中学 3年	<ul style="list-style-type: none"> 環境の変化に弱く落ち着かない。 	<ul style="list-style-type: none"> 事前予告 視覚支援 (スケジュール、画像などの利用) スモールステップ 	<ul style="list-style-type: none"> 落ち着いて生活でき、卒業式にも参加できた。留守番ができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者が本児に経験をさせていない (やらせていない) ことが多いと気づく。 中学から特別支援学校高等部へ ICF の結果を含め情報提供をした。

表 5 - 1 費用支弁対象児内訳とケース概要

エ 活用した事業の意見

○日々の記録を入力するのは1人ずつ時間を設けて行うことになる。慣れていないので時間もかかる。7000円で1件は、割にあってはいるが費用支弁がなくても、活用したいと考えている。“視点をもって支援をする、環境を整えることは大切”と、職員に実感してもらいたく職員の研修にもなるため。たくさんはできないが1件を1年かけて丁寧にやっていきたい。また、費用支弁があることで、労力に見合った対価がいただけると職員、事業所全体のICFへの取り組みもより積極的になるかもしれないが、逆効果になることもあるのではとも感じる。

○実施する事業所としては、金銭的なことはあまり考えていない。ICFの活用は大変と言えば大変で時間はかかる。やっている時は大変だと思うが、会議が終わるといつもやってよかったと思う。今後多くのスタッフがやる場合は、費用支弁があった方がやる気になるのではと思う。支援会議に数人のスタッフを出席させるのにも、費用支弁があると出席させやすい。

オ 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

【費用支弁について】

・今後継続していく時、1件当たりの費用設定を再検討するかどうか。設定する件数の設定をどうするか。今のままで悪くはないが、実施者の話を聞くと再検討する余地はあるとも思う。

・学校や保育園は費用がない。先生自身の困り感が解消されたかが大切。先生自身が困っていることを抱えているところで、ICFを使って、困り感が解消された、軽減されたとなれば労力をかけてもICFをやっていこうというモチベーションになる。先生たちの困り感がどれくらい解消されたか評価していかないとなかなか現場には広がらないのではないか。効果が見えてくると、労力をかけてでもやってみようとなる。

・今後さらなる普及に向けて、行政の半強制的な研修参加、費用支弁、保護者からの要望と合わせて進んでいくととてもいい。

【費用支弁の対象となった児の状況等について】

・今年度は会議の見学をした。見ているだけで感動した。1人の子に対して事業所、保育園、保護者が強みを見つけ、支援して、いい所を見つけ、伸ばしていく話を聞いて嬉しくなった。保護者もその子の良さをあらためて感じる事ができたように感じる。ICFと聞くと難しいイメージを持つが、会議に参加するといいいのではないかと思った。

【保護者への周知について】

・保護者とは信頼関係があり、ICFの話はしやすい。チラシがあればもっとわかりやすく説明しやすくなるのではないか。スタッフも冊子があると今後保護者に勧めやすい。

【費用支弁を含めた全体の取り組みについて】

・利用の仕方が進展している。心強く、うらやましい。皆で議論して、システムの構築をしている。昔は地域独自のやり方が進まず、地域が専門家に頼りきっていて、専門性、実力が蓄積されていかなかった。今は変わってきた。ここ数年の碧南の動きは力強く興味深い。今後どう成長していくか楽しみにしている。

(8) 考察

費用支弁を受けICFシステムを活用したこと対象児については、支援者間の情報共有、支援の統一が図られたことはもとより、虐待の発見や次のライフステージへの引継ぎがスムーズに実施された。

しかし今年度、費用支弁を活用した事業所は、昨年度のモデル事業でICFシステムを活用している事業所であり、新規の事業所の利用はなかった。活用実績のある事業所には、継続活用の一つのきっかけにはなった。しかし、継続活用の大きな理由は、ICFシステムを活用することでのスタッフへのスキルアップや支援の質の向上を期待するものであった。また、費用支弁の金額や対象などについては、金額をあげればよいというばかりではなく、今後検討していく必要がある。ICFシステムを活用により支援者はその効果を実感するため、今後は活用支援者の困り感の解消なども評価し、効果として周知していけるとよい。

6 モデル事業の全体の成果

通常版 I C F システムでの課題であった情報収集の労力については、コアセット版の活用により軽減された。コアセット版では通常版に比べ情報収集項目が半減されたが、情報収集からの気づきや、支援計画の質、多領域連携での効果的な実現など通常版でよい効果が確認された項目について、コアセット版でも同様の効果が確認された。

コアセット版 I C F システムに直結した日々の支援記録の活用は、慣れるまでに多少の時間はかかるが、使い続けることで記入に慣れ、I C F システムの記入負担が減ることが確認された。

これらのことから、コアセット版 I C F に直結した日々の支援記録とコアセット版 I C F システムの活用を併用することで、一般的な日常支援においても I C F システムを活用しやすくなると考える。

また、それにより多角的な情報収集や支援計画の質の向上など碧南市地域支援体制の充実と家庭・教育・福祉の実効的なトライアングル連携につながると考える。

費用支弁については、現時点ではまだその効果はしっかりと確認できていない。費用支弁の費用等への検討をするとともに、I C F システム活用の動機づけとして活用した支援者の困り感の解消なども評価し、効果として周知していくことも必要である。

7 課題と今後の展望

今後の課題は、① I C F の土壌づくり、②日々の記録の普及があげられる。

それぞれの課題に対する具体的な今後の展望は以下のとおり。

(1) I C F の土壌づくり

ア どういう場面、どういう環境がその子の潜在的力を引っ張り出すかという捉え方の周知をする。(I C F 研修、児童発達支援ネットワーク研修等)

イ 園長級など各施設長の上記研修への半強制的な参加

ウ 保護者用 I C F システム紹介冊子またはチラシの作成

エ 支援者用 I C F システム活用の効果チラシの作成

オ 費用支弁の継続と内容の検討

カ 市内の児童が通所する市外事業所への研修周知

(2) 日々の記録の普及

ア ICF 研修で周知

イ 毎回全部入力しなくてもよいこと、数日間かけて情報を取っていくことを全体で周知

ウ コアセット早見表を使う

エ ICF 研修への参加により、身近に記入方法について聞ける人を確保

付録

1 企画・推進委員会の実施状況等

(1) 企画・推進委員会開催時期及び検討内容

表 8 - 1 企画・推進委員会第 1 回～第 3 回の開催日時及び検討内容項目

	日時	検討内容
第1回	令和 2 年 6 月 1 9 日 13時30分～15時	(1) ICF情報把握・共有システムを使った発達支援普及推進委員会について (2) 昨年度のモデル事業の成果報告 (3) 今年度の事業計画案策定 ア 今年度の事業概要（案） イ ICFコアセットの導入について ウ 日々の支援記録の工夫 エ ICFシステム活用事業所への費用支弁
第2回	令和 2 年 1 1 月 2 7 日 13時30分～15時	実施状況報告と今後の進め方 (1) ASD・ADHDのICFコアセットを導入し情報収集項目を絞り込んだICFシステムの活用について (2) 日々の支援記録をICFシステムに直結させる工夫について (3) ICFシステムを活用する事業所への費用支弁について
第3回	令和 2 年 3 月 1 9 日 13時30分～15時	(1) 今年度の事業評価 ア ICFコアセットを導入し情報収集項目を絞り込んだICFシステムの活用について イ 日々の支援記録をICFシステムに直結させる工夫について ウ ICFシステムを活用する事業所への費用支弁について (2) 今後の展望について

(2) 検討内容の概要

< 第 1 回企画・推進委員会 検討概要 >

今年度の事業計画案策定

(1) ICF コアセットの活用について

- ・項目が減ってきているので、支援記録と併用してやっていきたい。
- ・項目が減ったことでもう少し情報を取った方がいい所を見ていきたい。コロナの影響で子どもに影響が大きかった。環境因子をどのように書いていったらいいかを考えていきたい。
- ・親子支援事業で、使ったほうが良いから利用件数を増やしたいとの話だが、増やしたいと思った経緯は何か？

- ・(親子支援事業支援者)コアセットになり、量が少なくなったことと、ICFを使うことで欲しい情報がわかりやすくなったため。ICFを使わない今までのやり方とコアセットを使うやり方を両方試したが、コアセットを使った方が整理がしやすいので使っていきたいという話になった。

- ・実際にやってみて、変更しながらいいものにしていく。コアは中心という意味。この中に入っていない情報でどんなものをとるといいのかを実際に使いながら考えていけるといい。

(2) 日々の支援記録の工夫について

- ・日々の記録は現場では主観的になりやすく、漠然としやすい。使うことで、見やすくなるのではないか。しかし、使うことで項目が「できればいい」という見方になり逆に子どもにやらせてしまうのではないか。しっかり見ていけるようにするいい方法はないか。

- ・確かに現場では起こりそうなご意見である。ICFシステムは評価ではなくて支援であり、どう支えていくかである。そこを伝えていけるようにする。言葉を「支援」ではなく「環境調整にする」など、検討していきたい。

- ・記録を書くときに、今は「活動と参加」を書いていると意識する。やりながらリマインドする。用紙の隅に分かるように記入しておく。すり合わせをしていくといいのではないか。

- ・にじの学園でも記録を使い始めた。視点をもって見ていくことが大切だと思う。

(3) ICFシステム活用事業所への費用支弁について

- ・保護者の会として、どう動くといいよいか他の方のご意見を伺いたい。

- ・保護者同士の口コミをお願いしたい。「あそこの事業所はICFをやっている」というようなことはどうか。行政では言えないことである。

- ・昨年度ICFシステムを活用したことで、保護者と普段の会話も細かく話せるようになった。保護者も話しやすくなったと言われた。担当者会議で自分の子が迷惑をかけていると思っている保護者が多いが、そうではないことを伝えるのに時間がかかったが、ICFを使うことで、伝えやすくなりとても喜んでもらった。実際に経験した保護者は良さをとても分かってもらえるが、実際やってないと、わかりづらい。

・子どもで記録をつけたりして、良さは分かっているから期待はしている。流れるなことは分かっても、実際やっていないので難しい。相談しながらやっていきたい。

(4) 全体を通しての意見、質疑

・日々の記録が事業所で使っているモニタリングと似ている。事業所としては吸収しやすい。評価の「Cかなり支援が必要」の「支援」とは、介助（手助け）を意味する支援か、環境を整えらとできるようになる配慮としての支援になるのか。

・ICFは環境調整支援なので、配慮になる。配慮ある環境の中で子どもが活動することによって子どものペースで発達すると思う。子どもの発達を促進するための環境を提供する。これをどう伝えていけるかが課題になっている。「多少困っている」「かなり困っている」にして、子ども主体の表現にして困っていることに対してどう助けていくかという捉え方にした方が間違いないか。配慮は手伝いすぎることではない。

・市の中で広がっている。事業所、学校、保護者で連携していくといい。自分の支援は普段はアナログでこのようなデジタルな方法は分からないが、発展を期待している。

・昨年 ICF システムを使った子が中学に進学した。昨年の姿の情報を、担任が指導に利用していこうと言われていたのが印象的だった。今後も連携をしていけたらいい。

・昨年研修を受けた。支援者会議にも参加した。担任や保護者の変化があってよかった。経験しないとわからないので、多くの人にやってもらえるとよいと思う。園長や主任など指導者に対する研修をしてほしい。視点も変わっていくのではないかな。

< 第 2 回企画・推進委員会 検討概要 >

(1) ICF コアセットの活用について

・親子支援事業でコアセットを渡しているが、渡す以前にコアセットに保護者が記入することはあるか。

・（親子支援事業支援者）保護者が記入することはない。支援者で今の姿を捉え記入し、面談時に保護者と子どもの姿を共有していく。課題をコアセットの記録を基に伝えている。

・親子支援事業 25 名に活用し、情報共有をしてからの保護者からの感想、印象があるか。

・（親子支援事業支援者）見せると不思議そうな保護者もいたので、使い方の説明を事前にして使い始めた。育児不安の強い保護者の例をあげると、子どもの発達は問題なく、今

まで「大丈夫」と言われてきたが、漠然と言われるだけで不安はなくならなかった。しかし、コアセットを使って、子どものできている部分を具体的に伝えていくことで「できているんだ」と腑に落ち安心して過ごせるようになったという人がいた。支援方法も具体的に伝えているので、実際家でやってみてうまくいったという声もある。

- ・昨年から ICF システムを使用している。今回項目が減り、スタッフの労力は減ったと感じる。昨年まで自分が全部入力していた。今年は常勤スタッフが日々の記録を加えて入力している。スタッフは保護者との会話が苦手だった。コアセットを使うようになり、個々にできることを見られるようになり、保護者にも伝えやすくなった。伝えることで、保護者からの連絡帳もできることをたくさん見てくれるようになっており嬉しい。

- ・昨年に続き、1人の支援会議をしている。今回の目的は事業所、保育園、家庭での姿にギャプがある子なので、コアセットを使うことで互いに共有、共通認識することも目的の一つだった。1回目の支援会議をし、参加した事業所、園、家庭が子どもの良い所に注目できた。具体的な手がかりがあるため、どこでも同じ共通項目でやっていける。園で具体的にできる条件が何かわかった。例えば、事業所では、若くてかわいい先生が好きではないかという見立てだったが、共有することで声掛けや本児への関り方が影響していたことが共通認識できた。活用方法は、職員5名と保護者で行う。項目は減ったが、普段活動で見れていない部分が明確になった。入力するためにそこを見ようとするが、そうではなく、普段の姿を見ることでそこに注目できていなかったことに気付くことが大事と認識できた。

- ・今回中学生をやっている。中1（継続）と中3（新規）の子。幼少期からの情報があるといい。縦の情報が必要。中3だと、いつできていたのかが分からない。保護者にも昔の情報をもらっているが、小さい時から活用していれば利用しやすくなるのではないか。

- ・親子支援事業での活用で直接コアセットのデータを見せなかった3名は、具体的にどのような保護者であったため伝えることが難しかったのか。

- ・教室内で保護者と関わる中で、たくさんの情報を目で見ると圧倒されると思われる方には必要な部分だけを抜き出して伝えている。

(2) 日々の支援記録を ICF システムに直結させる工夫について

- ・各機関での日々の記録の使いかたについて

- ・毎回全部入力しなくいいことを全体で周知した。1日に担当2, 3人。1人に

2～5個の項目を入力。できている項目は強みになるので、それ以上は基本増やさない。「見る」等同じ項目をたくさん書いてしまうが、見てないところに気付いて、次はそこを見ていこうと思えるようにしている。

・児発事業所で25人に利用している。日々の記録を3人のスタッフが記入。モニタリング、支援計画がある中で、沿った項目を見るようにしている。一人5項目書く。日々の記録を個別ではなく、みんなで見て入力している。違う見方を支援者で気づけるようにしている。支援計画を意識しすぎて、同じところばかり入力していた。コアセット早見表を使うことで、見ることから、真似にもつながる話をする、情報が分散し、見方が広がり記入できるようになった。

・(児発事業所) 日々の記録は毎日活用できていない。活動時間が長くもともと記録を書く時間がなく全利用児童には難しい。活用したい支援者5名はやってみたい子を一人ずつあげて記入した。当初、項目を見て大変さは感じた。全部でなくてもいいので、みられるところから入力した。

・(親子通園施設)3名の保育士が3人の子を入力。30年度に通常版ICFシステムで経験した保育士3名がアドバイザーになっている。設問の意味を説明して使っている。毎日の記録もあるがそれと同じぐらいの時間で入力できる。1人15分くらい。視点は今まで見てなかったところに気付けた。それぞれが一番知りたい子を抽出児であげた。コアセットに入力するときに、困難ありが多くなった。重複障害の子や、自閉障害の重い子だったので、強みが少なくなった。抽出する子で差が出る。発達年齢的に高い項目は非該当でいいのか、疑問だった。

・発達年齢で見ればよい。生活年齢ではできないことがいっぱいになってしまう。項目数が多いことに関して、関係機関で分担し、全項目を書こうとしない。ICFはなぜ環境と一緒に見るのかという、その子の生活を見ると、やりようがあるので生活を書き留めていくこと。支援者が余裕をもって、楽しく子どもと関わるのが大切である。全部埋めなくては、とれてない項目を見なくてはと思うと、自分を追い込んでしまう。楽しく関わる中で支援のヒントを拾っていく。場面設定で見る時子どもと距離をもって見る。「こうしたら、こうなるんだ」と見ることが大切。支援者が楽しむことも大事だが子どもが楽しめているか。楽しいからもっとやる、という場面をどう提供していくかが大切。支援者が頑張りすぎて、もっとやらなくては、と子どもを引っ張りすぎると、難しくなってやりたくない、逃げ出したくなる。逃げると、多動と言われる。それは支援者の設定が悪い。逆

に簡単すぎると飽きてどこかへ行ってしまう。これも多動と言われる。支援者が余裕をもって、子どもが楽しんでいるかを感受することが大切。発達障害の子どもは正直。嫌なことは、嫌と言う。そこを捉える。何日間かかけて情報を取っていけるように広がっていくと良い。

- ・スタッフの見る目が養われていると感じた。保護者に「こうするとできた」と、伝えることができたことで「プロフェッショナルになった」とスタッフに自信がついてきている。

- ・日々の記録を支援計画に沿って試しているが、支援計画目標を ICF の項目の中から選び出すことを検討したことはあるか。

- ・記録の評価から、自然と広がっていくのは難しいのではないかと。ある程度の強制力があることで慣れていくかもしれない。

- ・ICF 自体はすごくいいシステムだと思う。会議に参加したスタッフもよかったと言っている。しかし、日々取り入れるとなると、課題はある。今後検討する内容も変わる。勉強ならこのまま広めることもできると思うが、自然と広まることを期待するならば、入り口を「やってみたいな」と思えるようにもっと広げることには焦点をあてることも必要ではないかと思う。

- ・目指している所は、子どもの困難さは環境との関りでおこるものだということが地域に広がっていくことが1番。それをやるために、ICF は使いやすい。多職種が専門用語ではなく日常の言葉でコミュニケーションをとるのに使いやすい。少しずつでいいからやってみるとわかってくる。1回やってみようと動かしていくと定着していくかもしれない。例えば幼稚園、保育園の園長先生に成果を伝えたり、使い方を伝える。教育では特別支援教育コーディネーターの研修の中に取り入れたり。市の事情はあるのでそれぞれのやり方で定着していくのがいい。そうすることで支援者の見る視点が変わっていくことにながっていく、と考えている。

- ・行政の立場からの回答。ICF を使った支援はやればいいことは分かっている。モデル事業として碧南市も理解している。ICF を取り入れた支援は5年で終わるとは考えていない。普及事業というのは ICF 普及のための挺入れの事業という位置づけなので5年間普及を目指して挺入れするということ。ICF は事業が終わったからと終わりにするわけではない。5年後の事業終了時に評価をいただき、足りなかったところ、よかったところの評価を基に次の事業に展開していくと考えている。

- ・今後保護者への ICF の紹介はどのような形でしていくか。実施している事業所が限られ

ている。他の事業所もいいものと気づいているが実際やる時に、保護者からやってほしいという需要があればやってみようと思うのではないか。今の現状を保護者はほぼ知らない。ICFと聞いただけではどんな事業かわからない。周りにICFの話を一言で言うかどうかという事業なのかと聞かれても説明しにくく、伝わりにくい。いいものだと感じているので今後も続けていって事業として成り立ってほしい。強制的な部分も含めてやってもらえると、保護者にも支援者にもいいのではないか。

・ICFを勧めていくことはいいことだが、サービスを使っているすべての児童、生徒に使うことは現実的には非常に難しい。広がればいいが、事業所の支援員、相談支援専門員、からの意見を聞くと全員がこの手法を使っていくのは近々では難しい。行政としては、この手法が常識になり皆がこの手法でやることになることは理想だがまだ勉強段階。早急に全ての人にとというのは今の時点ではまだ時間が必要。事業所は時間と余裕があればすべての子にと思われられるかもしれないが、この子には必要かなという子からやっているのが現状。

・親子支援事業では、当初コアセットを活用するのは数人の予定だったが、全員やった方が子どもの理解もできる、思ったよりも大変ではないから全員やろうとなった。小さいころからやると、情報収集は少しで済む、保護者と共有しやすくなる。まず親子支援事業で情報を取り、親子通園施設、事業所への流れができていくと自然と広がるのではないかと思う。その為、まだ数年はかかる。親子支援事業では支援者に強制はしていない。やらされ感では、長くは続かない。

・ICFの土壌づくりがまずは大切。まず園長先生や学校教育に、やるやらないではなく、こういう考え方があることを分かってもらうことが大事。ICFコアシステムはどういう場面、どういう環境がその子の潜在的力を引っ張り出すかという捉え方が大事。まずは知ってもらうこと。早期からというのはとても重要。

・今、親子支援事業にいる子が大きくなってICFを経験している保護者から口コミでいいよと広まっていくことを期待している。

・学校や事業所の決まった書類があるので、そことどのようにリンクしていくか。どちらも合わせてできるようなものができると楽に移行していけるかと思う。事業所としては、その難しさは感じているので解決できたらいい。

・ICFとリンクする物を考える必要はある。双方の良い所を取り入れたものを作っていけるといい。

(3) ICFシステムを活用する事業所への費用支弁について事務局より説明

・保護者とは信頼関係があり、ICFの話はしやすい。チラシがあればもっとわかりやすく説明しやすくなるのではないか。スタッフも冊子があると今後保護者に勧めやすい。

エ 全体を通しての意見

・個々の事例の関りもなく、ICFの活用にも参加していないが、利用の仕方が進展している。心強く、うらやましい。皆で議論して、システムの構築をしている。昔は地域独自のやり方が進まない時期もあったが、今は変わってきた。以前は地域が専門家に頼りきっていて、専門性、実力が蓄積されていかなかった。毎年同じような課題、具体的にこの子どもしましょうという相談があった。保育園では発達障害の子ばかり担当しているわけではなく、専門の人はなかなかいない。地域がしっかりと主体的に構築することは難しかったが、ここ数年の碧南の動きは力強く興味深い。今後どう成長していくか楽しみにしている。

・ICFがいいものと分かった。広がってきており、実際使って成果がでていいる。広がりと共に、時間の面で困難もあるかと思う。事業所で使い、学校、園とも共有していき、専門性を高めていけたらいい。

・昨年の対象の子が知っている子で1年携わった。担当の先生がゆとりを持てるようになったと言われたり、保護者の変化、チームでの考え方のまとまりを目の当たりに見て、ICFシステムを活用することは素敵なことだと思った。園長、主任、指導者への周知が大事。今年は研修だけの参加だったが、研修より参加することで、実感する。毎年1園ずつでも参加して広げていけたらいい。研修は強制的でも出ることでICFとはどんなものか知る、実践することで実感することが大事。

・園長、主任が研修に参加して、指導や一緒に考えていけたらいい。今年会議の見学をした。見ているだけで感動した。1人の子に対して事業所、保育園、保護者が強みを見つけ、支援して、いい所を見つけ、伸ばしていく話を聞いて嬉しくなった。保護者もその子の良さをあらためて感じる事ができたように感じる。ICFと聞くと難しいイメージを持つが、会議に参加するといいいのではないかと思った。

・アンケート結果より、記録時間が短縮されたと「少し思う」が多かったことは成果がでてきていると感じた。話を伺っていても、負担も少なくなって短縮できるかもしれないと期待できる。ユーザーサイドから普及を促す。保護者から使ってくださいというのは期待

できる。行政の半強制的な研修参加、費用支弁、保護者からの要望と合わせて進んでいくととてもいい。

・使いやすくするのも一つだが、支援者が余裕をもって子どもと関わるのが大事。今の姿からその子を支援するヒントをもらう。支援者、保護者の考えがリンクしていくといい。地域をよくしていくこと、今後どう改善していくといいか両輪で進めていき、子どもたちの幸せにつながっていくといい。

<第3回企画・推進委員会 検討概要>

(1) 今年度の事業評価

ア ICF コアセットの活用について

・ICF 評価を統計的に見てよくわかった。令和元年、2年では支援者や扱うケースも違うので、誤差の範囲かと思うが、割合で言うと若干下がっている項目がある。対象理解は少し下がっている。逆にチームでの協同は肯定的な回答は増えて、割合が高くなっている。労力が減った分だけ連携がしやすくなったのか、その分細かく見るわけではないので、落ちる部分もあるのかもしれない。統計学的に言えば誤差の範囲。下がったと言っても90%以上と高い数値なので気にすることでもないのかと思う。コアセットにして減らしていくと対象理解、アセスメントで多少トレードオフのこともあるという理解でいいか。

・ケースを積み重ねる中でどうやったら数値がついてくるか。ICF、ASD/ADHD コアセットはASD、ADHD 向けなので知的障害は対象ではない。項目は知的障害を伴っている子にフィットはしていないという理解は必要。問題性の現れとして数字に関わりなく出てくるものとして捉えている部分がある。補完しながら情報をとるといいが、評価者のスキルによる。今後の課題。ASD/ADHD のコアセットは変えられないので、付加する物をどうしていくかが課題になる。

イ 日々の支援記録を ICF システムに直結させる工夫について

- ・親子支援事業の支援者と、児童発達支援の1カ所では通常の記録として使用している。
- ・親子支援事業では通っている子ども全員に対し、支援者が全員記録として、この様式を利用している。一度に全ては書かない。書く中で、見てない部分に気付き偏りに気付く。そこを見れるようになると、それが当たり前になり、見立てが自分ででき、自

信にもなる。たくさん書きたくなるが、行動で見て簡潔に書くことで負担は少ない。看護師も書き、子どもの姿を捉えている。保護者にも見せることで、伝えやすくなった。

・支援員が、登録している25人は日々の記録を使用している。1日5, 6名ずつ。行動で追って書くことで、子どもの視点に立つようになったように感じる。しかし、日々の記録を書くのにたくさん書いた方が後でいいのではないかと1人に対して何十分もかけたり、書く前に1時間以上話し合ったりしている。その時間が少なくなるといい。日々の記録でたくさんいいことが書いてあるが、コアセットに落とすことがまだ難しい。

(2) ICF システムを活用する事業所への費用支弁について

(虐待が発見されたケース)

- ・母は「子育てに困っている」とICFを使用することに承諾したが会議には保護者は出席しなかった。様々な機関と情報を共有できたことは大変良かった。
- ・保護者支援が難しいが、今後どうしていくかを話し合えた。

(中学1年生 昨年度からの継続ケース)

- ・不安が強かったり、コロナの影響もあり登校拒否気味であった。主治医にも情報をいただき、現在学校には母と登校し、朝の会と1時間目に参加し、母が迎えに行くことで学校に行けている。事業所も1時間から1時間半の利用にしている。
- ・小学校から中学校に上がり、なかなか上手く現場に情報が伝わらないという課題がICFの支援会議を通して分かった。
- ・事業所、学校、家庭が同じ目標を持てた事で本児が安心できた。3年間まずは学校が楽しいところとなることが目標であると、事業所、学校、保護者で共有し、結束力が強まった。本人は学校の先生と話をするのが楽しいと言うようになった。

(中学3年生 4月から特別支援学校高等部へ進学)

- ・保護者は中学生になった時、みんなと同じように生活させなくてはと一所懸命で、本人には頑張らなくてとは負担であった。支援会議をして無理をさせていた、と保護者が気づいた。中学から特別支援学校への情報共有は今までなかったが相談支援専門員、学校教育課の協力で共有できた。できることを共有できたのはよかった。
- ・言葉が苦手。上手く伝えられず、「やらない」と言うことが多い。しかし場面で見ると、「やれない」という意味もあるのではないかと気づいた。支援者の思い込みがある

と気づいた。本児は慣れるまでに時間がかかるため、次々にやっていくのではなく1年かけてじっくりやっていくことがいいことも支援者で共有できた。

(保育園年長 4月からは市内支援級へ進学)

・家庭、事業所、園での姿が違い、ギャップを感じていたので対象にあげた。0歳から保育園に通い、年々クラスの数が増えていくことで感情のコントロールが難しい時は、クールダウンの部屋を用意してもらっていた。事業所では少人数で訴えや書くこともできたが、園では指示や他児との行動は難しかった。支援会議を通して園と事業所で上手くいく情報がたくさん出てきた。園、家庭、事業所で統一した支援ができるようになった。ライフステージがあがった時に心配であり課題はあるので、今の情報を小学校に伝えていけるといい。

・学校にICFの情報提供をするために、学校教育課から校長に連絡をしてもらい、来週以降に引き継ぐ段取りをした。

・保育園の情報をたくさんもらった。得意不得意が見えた。これを学校に引き継げるといい。園の支援、事業所の支援、保護者からの情報が集まり次のステージへつなげる、とてもいいまとめができたように思う。

<主な意見、質疑>

・事業所の方に質問。活用する対象児をどうやって選んでいるか。今後ICFをよかったと聞いた保護者が使いたいと言われた場合、その保護者を対象に使うことは可能か。

・対象は他機関との連携が必要な子。まず、事業所内で相談し、その後、相談支援員や福祉課と相談する。事業所で6人対象児をあげたが、支援員は5人なので支援員の負担をかけすぎないようにとは考えた。

・今回の対象児は、環境を整えていくことで本来の力が発揮できること、本人が園生活に困っていることが見えてきたことを理由に選んだ。昨年も同じような理由。環境を整えることと、支援方法を統一させることで本人が困らない環境をつくることをおもきにしている。1件でも2件でもすることで職員の視点が大きく変わってきている。職員の研修の目的でもある。興味関心ある方は相談して検討していきたい。

・碧南市として、7名対象だったが、予算的に今回の7名は多かったか少なかったか。ずれているならその理由は何か。事業所は今回の費用支弁で提示された金額と実際ICFを用いることでかかった追加費用はおおよそ見合うものか、又は多すぎたか、少

なすぎたか。

・予算は30件と多めに見込んでいたが、結果は7名12件であった。新規に事業所が入るとよかった。

・実施する事業としては、金銭的なことはあまり考えていない。大変と言えば大変。子どもの視点に立って情報を入力するが支援者視点になってしまい、何度も書き直した。ICF研修受けているが、支援者同士の視点の差はある。保護者対応も難しい。モニタリングして改善されているが、時間はかかる。労力を対価するのはよくわからない。しかし、その時は大変だと思うが、会議が終わるといつもやってよかったと思う。今後自分以外の方がやる場合は支弁があった方がやる気になるかと思う。自分は思いで動きすぎてしまう所があるが、それがあったからこそ毎回上手くいっていると感じている。

・7000円で1件は、割にあってはいない。日々の記録を入力するのは1人ずつ時間を設けて行うことになる。慣れていないので時間もかかる。

その中でなぜやるかと言うと、視点をもって支援をする、環境を整えることは大事、と職員に実感してほしい。職員の研修として行う。たくさんはできないが1回を1年かけて丁寧にやっていきたい。

・今後継続していく時、1件当たりの費用設定を再検討するかどうか。設定する件数の設定をどうするか。今のままで悪くはないが、実施者の話を聞くと再検討する余地はあるとも思う。

・外部での研修でインクルーシブ保育と並んでICFの考え方を聞くようになった。今年幼稚園の利用はなかったので、保育園での支援会議に参加した。今までよりも支援者の変化、保護者の変化をより感じられることができた。より多くの保育者に広めたいと思う。来年度、園長、主任対象で安達先生に話していただくので今後もICFの考え方が広がっていくことを期待している。

・2回会議に参加した。会議が終わった時に園、保護者、事業所が子どものためにどんなことができるかと、みんなで考えて前向きになって会議を終えている。来年度園長主任研修があるのでよりICFを理解して、子ども達のために活用していきたい。

・会議には参加できなかったのですが、結果を聞いて感じたことは、環境を整えることの大切さと、それを知ったうえでどのように支援できるかが大切。時間的な負担もあるが、コアセットで軽減されてるので、研修をしながら続けていけたらいい。

・学校や保育園は費用がない。先生自身の困り感が解消されたかが大切。先生自身が

困っていることを抱えているところで、ICFを使って、困り感が解消された、軽減されたとなれば労力をかけてもICFをやっというモチベーションになる。もっと広く普及していくなら、使ったことで、先生たちの困り感がどれくらい解消されたか評価していかないとなかなか現場には広がらないのではないか。効果が見えてくると、労力をかけてでもやってみようとなる。

(2) 今後の展望について

<主な意見、質疑>

- ・病院の言語聴覚士や作業療法士に支援会議結果をフィードバックした際に、個別でしか見れないが、自分達（OT、ST）の出した課題と、ICFから上がってくる課題がリンクする面白さがあったと言われていた。また主治医は、「（医師は）保護者からしか話を聞かないので、小集団の場面での情報をもらえたのは役に立った」と言われた。皆さんにお伝えしておきたかった。

(3) 全体を通しての意見

- ・毎年この会議に参加しているが、着実に事業が発展している。機会があれば支援会議に出たい。

- ・保健の分野だが、ICFの考え方で支援をしていくことを課の中で情報伝達し、情報に乗り遅れないようにしていきたい。

- ・30年度にフルセット利用が3名、今年度コアセット利用が3名。来年度より全員が日々の記録、コアセットを利用予定。日々の記録、月の記録、園の記録等、プラスになるのは職員の負担になるため、何が必要かを考えて行っていく。園内での事例検討会の際にこの記録を使っていけると負担なくやれるのではないかと思います。

- ・ICFツールがあることで情報共有となるとバラバラにいる支援者が集まって連携を取ろうという仕組み、きっかけになっている。コアセットを使った方が労力が減ってやりやすい。この先対象理解を深めていき、同じ視点で子どもを見ていくとなると、まだまだプラスしていかなければいけないものがある。広がりを持つと、今は市役所と関連する団体で行われているが、守秘義務、情報開示をどこまでしていくかという問題があり情報共有しにくい。

- ・事業の継続性が大事。引き続き一緒に考えていく。事業全体でも継続性を大切にやっていけると良い。医者は何でも知っているようだが、得られる情報は少ないし

偏っている。このような取り組みで医療関係を入れていくと、医者が利用できる情報が立体的になる。

・コアセットを現場で試したのは碧南市だけ。それなりの効果も出てきている。細かい部分で低下している所もあるので、出てきた課題をどう解決していくのか。コアセットで労力を考えて評価を出せてきたことはよかった。ICFシステムはすごく大変そうという噂があるが、やってみたらすごくいいとなるにはどうしたらいいか。来年度はその土壌づくり、下支えできるような地域支援体制づくりの計画を練っている。支援会議をやってこんな風に子どもが分かる、支援者の喜びが労力を超えてくれるといい。全体で使うことで、クリエイティブに活発化できるようにできるといい。現場に分かる人がいると使いやすくなる。地域支援全体になるが色々な課題が見えるので1つずつクリアし、やれることをやっていく。

(3) 企画・推進委員会及び事務局名簿

表 8 - 2 企画・推進委員会委員名簿及び事務局名簿

No.	役職	職業(役職)	委員氏名
1	会長	北海道大学大学院教育学研究院 教授	安達 潤
2	副会長	愛知県医療療育総合センター中央病院児童精神科医長	吉川 徹
3	委員	日本福祉大学子ども発達学部子ども発達学科 教授	渡邊 顕一郎
4	〃	親子の会 カラフル代表	鈴木 由記
5	〃	社会福祉協議会ふれあい相談支援事業所 相談支援専門員	古川 裕隆
6	〃	合同会社 祐愛 代表社員 りはくる(児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援事業)	小幡 一美
7	〃	合同会社 Win 代表 ぷちま〜る(児童発達支援)	藤原 直子
8	〃	特定非営利活動法人 ARTIST JAPAN 理事長 ゆり学園(児童発達支援、放課後等デイサービス)	森脇 友理
9	〃	碧南市学校教育課 教育相談室 臨床心理相談員	二宮 直樹
10	〃	碧南市学校教育課 指導主事	藤浦 一
11	〃	碧南市保健センター 母子保健係長	羽佐田 美和子
12	〃	碧南市こども課 指導主事	伊藤 寛美
13	〃	碧南市こども課 指導保育士	杉浦 淳子
14	〃	碧南市にじの学園長	鈴木 智美

<事務局>

福祉こども部長	杉浦 秀司
福祉課長	杉浦 浩二
福祉課 発達支援係長 (発達障害児者地域生活支援モデル事業マネージャー)	鈴木 信恵
福祉課 発達支援係 主査	山口 京子

2 成果の公表実績・計画

今後、碧南市役所のホームページにて実施内容や成果等の掲載する。